

42230

教科書文庫

4
810
42-1926
200030 1731

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

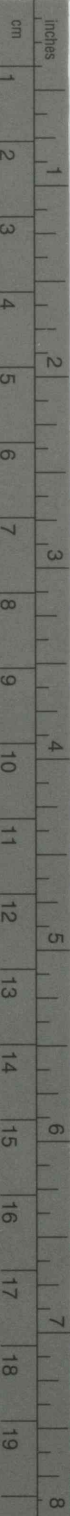


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Hi19
資料室

女子新讀本 卷十



3859
H19

文部省檢定濟

大正十五年十月二十一日 高等女學校國語科教科書

東京帝國大學助教授久松潜一編



新讀本



東京 至文堂



女子新讀本 卷十

目次

- 一 自國を凝視して……………二 荒芳徳……………一
- 二 自然の寂光……………吉江孤雁……………三
- 三 破 鐘 (韻文)……………上田 敏……………三
- 四 人を動かす春色 多きを用ひず……………綱島 梁川……………三
- 五 薬師寺……………和辻 哲郎……………四
- 六 新時代の 大問題……………野田 義夫……………四
- 七 西行法師……………(上田 秋成)……………五

目次

八 元祿風(俳句)..... 六〇

九 奥の細道抄..... (松尾芭蕉)..... 六二

(一) 松島..... 六三

(二) 平泉..... 六五

(三) 象潟..... 六六

一〇 芭蕉の生活..... 藤村 作..... 六九

一一 暮鐘(韻文)..... 土井晩翠..... 六八

一二 尾形光琳..... 徳富蘇峯..... 一〇一

一三 徒然草抄..... (吉田兼好)..... 一〇二

(一) 柑子の木..... 一〇五

(二) 同じ心ならむ人..... 一〇六

(三) 虚言..... 一〇七

(四) 偽りても賢を學べ..... 一〇九

(五) 能をつかむとする人..... 一一〇

(六) 一道にたづさはる人..... 一一一

一四 知と愛..... 西田幾多郎..... 一一三

一五 文章の一進境..... 幸田露伴..... 一一三

一六 自然詩人としての赤人と人麿..... 土居光知..... 一一〇

一七 百蟲譜..... (横井也右)..... 一一七

一八 苦悶と解決..... 與謝野晶子..... 一二四

一九 人臣の道..... (北島親房)..... 一五〇

目

次
終



女子新讀本 卷十

文學士 久松 潜 一編

一 自國を凝視して

日本現時の思想界は紛糾を極めてゐるといふ。これは事實だ。しかし、これを以て秩序なき渾沌と觀る事は當らぬ。予は寧ろ秩序ある紛糾と觀る。

何故に「秩序ある紛糾」と觀るかと云ふに、生命なき陋習を去つて、新しき生命を捉へんとする努力を動因とした紛糾

であるからだ。

以下數個の題材を捉へて新しき生命を直視せんとする現代の青年と、舊套を脱せざる老人との思想の相違に就いて吟味して見たい。

(一)

一部の青年は從來の忠君論に對しても、又愛國論に對しても、甚だしく不滿を抱いてゐる。

從來忠君と云へば常に直接天皇及び皇室に對し奉る忠純なる行爲を稱し、愛國と云へば常に直接國家を對象とする眞摯無私な活動と解せられてゐる。而して各個人の私生活、即ち直接に皇室又は國家を對象としない行爲は、如何

に眞摯純誠なりと雖も、其は忠君愛國の行爲とは稱せられてゐない。

一例を以ていへば、或村に一軒の豆腐屋があつて、毎朝雨の日も、風の日も最も誠實に、清い、味のよい豆腐を作つて、戸毎に鬻ぐとする。從來の忠君愛國論からすれば、彼は固より君に忠なるものでも、國を愛するものでもない。併しながら、彼の豆腐は村民の最も安心して買へるものであるとするならば、これは實に彼が自己の生業に忠なるばかりでなく、村民にも亦國家にも忠實なものであると云はなければならぬ。

又茲に一人の畫家があるとす。彼は特に口に國家に

對する愛を言はぬ、又別に皇室に對する忠を言はぬ。併し、彼は名利聞達を餘所に、自己の畫道の研精に日も夜も足らず、彼の全生命を捧げて孜孜として努めてゐるとする。この様な行爲は、直接には國家を對象としても居なければ、皇室を對象としてもゐない。しかし、彼自身はこれを自己自身为天職と觀じ、眞面目なる自己發現に努力する時、是は明らかに彼が全生命を日本我の榮光のために捧げつゝあるのであるから、彼を忠愛の國民なりと呼ぶに躊躇すべきでないのである。

之に反して、自ら忠君の士たるを自負し、口に愛國を唱ふる政治家と雖も、彼の一舉一動が多く欺瞞を以て充たされ、目前の私利私慾を逐ふに急にして、國家百年の計を立つる努力を缺いてゐるならば、彼は斷じて忠愛者ではないのである。

(二)

今日の先輩は今日の青年の氣風を憂慮し、彼等が有する國家心の薄弱を慨嘆する。さうして焦慮躁心の結果、種々の對策を講ずるが、多くは肯綮に中らないで、徒に新時代人の反感を買ふが如きは、何故であるか。

予は今最も卒直に、明治時代人の忠愛心と大正時代人の忠愛心との範疇が、甚だしく相異なる事實を、茲に述べねばならぬ。

明治時代を創造するに當つて掲げられた國民的目標は、勤王討幕の大旗であつた。明治の大維新を完成したのは、先づ内治外政に能力の乏しかつた徳川幕府を倒して、錦旗の下に國家を神武創業の昔に歸さうとする國民先覺者の運動であつた。さうして、此の回天の事業は、上明治天皇の御聰明御果斷によつて違算なく成就された。

明治維新の大業を恢弘にすると云ふ國民的生活信條は、その時代の各人の頭腦に頗る色彩鮮明に印せられた。明治時代の約四十年間は、國民は常に緊張の生活を續けた。曰く征韓論、曰く日清戦争、曰く北清事件、曰く日露戦争と、新興の日本はこれ等の大事件のある毎に、自己の實力の或は

足らざるを怖れて、所謂人心慘として驕らざるの精神を保持して居た。

此の時代の國民思想を誘導したものは、皇室を絶對高位に置いた尊王主義であつた。この時代、天下は翕然として皇室に歸し、「朝廷」「禁廷」「お上等」の一語は、端的に、直覺的に、その時代人に炎々たる熱情を燃さしめた。其には何等の説明も要しなかつた。

(三)

明治維新の大業を翼賛し、先帝の賢臣・良弼となつた諸卿は、國歩頻に艱難を加へたその當時の日本を擔任し、眞に一身を捧げて、自己の信條に殉ずる意氣を有して居つた。さ

うして、終に新しい日本は此の時代に生れたのだ。
新しい日本の經營には幾多の困難を伴つた。而も維新を成就した人々は撓まず屈せず、明治天皇を中心として、孜孜營々新國家の再建に盡くし、終に日本をして世界列強に並馳するに至らしめた。

顧みるに、明治維新は實に目覺ましい且世界を驚倒させた民族的大創造であつた。如何に我が先輩たる時代人が大膽に、而も周到に且眞面目に、自己を凝視して創造を企てたかは、我々後の時代人として、實に欽羨に堪へぬ所である。而も世人は、何故に此の大創造が巧に違算なく運ばれたかと云ふ事については、明治天皇の御果斷を擧げ、國中雄藩

の協力を數へ、義を觀て勇なる國民性を説き、外國の壓迫を因となすが常である。

これ等は固より皆重要なる原因ではあるが、而も尙一つ多くの史家の見逃してゐる一大原因がある。夫はこの時代に、日本は民族全體として大きな煩悶に逢着してゐた事である。

徳川三百年の治世は、太平が續いた、そして人心が緩んだ。凡ての階級は享樂を逐うて官能本位の樂しみに耽つた。物質慾は極むれば極むる程その深きに陥り、それと正比例して人の精神を餓ゑしむるものである事は、敢へて呶々を要せぬ。

徳川の末世には、人心期せずして變を求め、精神的更生の熱烈な欲求は、表面人生の眞諦を忘れて享樂を逐ふやうに見えた人々の胸の奥底に、一つの力強い潜勢力として存在してゐた。

明治維新の大業の完成は、この國民的煩悶が主動因であつた。さうして、英明なる明治天皇の出現によつて、王政復古てふ光彩陸離たる大旗を仰望し、一つの靈感的衝動によつて、期せずして億兆一心の團結を見たのである。

大正の時代も、今日に至つては正に國民的煩悶の時代である。國民は明治初代の如く民族の歸趨を示すべき大旗を求めてゐるが、これが未だ與へられてゐない。舊型の老

人は依然明治時代の「大旗」を僅かに色を代へて、國民に向つて「この下に集れ」と叫んでゐる。日露戦争の後に、民心は倨傲の氣を生じた。理想なき所に貪婪生じ、信條なき所に佻樂生ずるは自然の數である。今日最も吾人の相互に弔ふべきは、吾人が或程度の迷へる兒等である事だ。

(四)

明治の志士が内憂外患交、到る國家的危機に際して、一死を賭して新日本の建設に努力した沈痛の體驗はなく、却つて維新の制度——制度それは明治時代の先覺者の遺贈である——の餘光を得、時流の幸運に棹さして、今日顯著なる地位を占むる人々が、果して能く大正の時代的煩悶を理解

するであらうか。

今の社會的顯著者の多くは、實力才能に於てその儕輩を抜いた人々であらう。又假令維新の畫策に關與しなかつた人々も、維新の精神を繼いで銳意これが完成に努めた人である事も、我々は認めるに吝ならぬ。只我々の時代的煩悶が如何に強く、如何に甚だしいものであるかと云ふ一事に至つては、恐らく諒解を夫等の人に希望するは無益な事であらう。何となれば、煩悶は人生の一つの特殊な精神的體驗であるからだ。

前述したやうに、明治維新の當時に於ては、「皇室」の一語は端的に皇室と國民との關係を心から結び付ける言葉とし

て、當時の人心に驚くべき力を有つてゐた。大正の時代には、既に明治中葉時代までのやうに、國民が皇室に對して忠誠を竭くす以外に、世界に對する日本の國家そのものの目標が表はれて來た。

従つて、最も簡潔に言へば、新時代の國民的目標は皇室に對して忠誠を竭くすと云ふより、寧ろ皇室と一心同體となつて日本を世界的に光輝あらしめようとする目標になつて來た。

皇室を對象としてのみ我々國民は忠誠なるのではなく、皇室がその御信念として國家に盡くし給ふ所と、國民各自が自己の生活信條として國家に盡くす所とは、全く一致し

て不二なるが故に、國民は必然に皇室に對して忠誠である結果を生ずると考へるやうになつたのである。

換言すれば、今日の時代には皇室は日本民族の最上位に在つて、國家に對して御忠誠であり、國民各個は日本民族の構成分子として祖國に忠誠なる結果は、當然に又必然に皇室に忠誠であるとするやうになつたのである。

この主張は、斷じて一家言ではなく、實に史籍の上に炳乎たる日本建國の大理想であり、我が國體の矜誇である。

(五)

希望に輝く新進の現代青年は、世界全體を視野とし、日本帝國をして世界眞善美化の國際分擔を果さしむる爲に、先

づ自國を第一に神聖義勇の國家たらしめんとしてゐる。彼等に對して、世界を視野とせぬ狹量なる忠義を説いても、容易に彼等をして首肯信服せしむることは出來まい。

何となれば、現代青年の忠誠は日本國全體に對するものであり、同時に日本國民として世界人類に對するものであらねばならぬからである。

今の老年の多くは、既に軌道に乗つた明治時代の日本を經營し來り、概して順調な日本を預つて來た。故に多くは眼前の事實を重視し、遠き將來の計畫を輕んずる傾向がある。然るに、現代の青年は一度校門を出ると、その接觸する社會は學校で想像したやうな立派な社會でなく、國家は天

然資源の缺乏、人口の過剰、國際關係の窮況等に立つを見て、日本民族は將來如何にして世界に立つべきかの問題に想到して、うら若いその胸裡には遂に煩悶なきを得なくなるのである。

此の如くして、現時代の青年は時代的煩悶と環境的煩悶との眞中に佇立する。人心殆からざらんとするも豈に得べけんやである。

抑我が皇室と國民の關係は、これを例せば恰も日輪と日光の如きものである。日輪の赫々と輝き、吾人をして仰がしむる所以のものは、その日光が輝々として照り渡れるからである。日光照らざれば、日輪恆在すると雖も、吾人は日

輪の存在を常に確認する事甚だ困難である。夫と同じ様に、國民が自らその行爲・行動の上に於て輝くならば、皇室の御光は夫と正比例して輝く。國民輝かざれば、皇室の御光も亦輝かぬのである。

日輪は中心で、日光は延長である如く、皇室は中心で、國民は延長であると云ふのは正しい見解だ。同時に、日光なくんば日輪の日輪たる所以なきが如く、國民なくんば皇室の皇室たる所以はないと云ふ見解も正しい。又日光は日輪を離れては存在しない如く、國民は皇室を離れては存在しないと云ふ事も正しい。日本の魂(又は生命)と日本人總べてとは離れて存在し得ないものである事を確認する者は、

皇室なくては我々は日本國民として存在しないものであることも確認するであらう。皇室と國民との共同始祖に渡らせられる皇祖宗を中心とし、君民一體となつて各自自己の分擔によつて民族的理想の實現に盡瘁すべき大抱負、大信念を培養、生長させて行くことが、今日の急務である。老年も青年もこの點に於て一致しなければならぬ。

(六)

我が歴史や乃至國民道德の書は、天皇の御仁慈、皇室の御愛民の御事蹟を多々記述してゐるが、天皇の御徳は仁慈、愛民といふやうな對國民的なことに止らずもつともつと深い民族的信念に根ざしてゐる事を忘れてはならぬ。日本

國民は古來國家、天皇に對しては一死を以て盡くしてゐるが如く、天皇及び皇族も祖宗及び國家に對しては國民の先頭に立たせられて、御忠誠を御竭くしになつた。歴史に現れた、神武天皇の御東征に皇兄五瀨命を失はせられた悲壯な事實や、日本武尊が僅か十六歳の御身を以て、艶麗なる少女に身を扮して巨賊熊襲を誅せられた決死的奇襲や、龜山天皇が元寇の際、身を以て國難に代らんと伊勢神宮に御祈誓あつた事や、近くは明治天皇が衆に先んじて、維新の大業を御斷行になつた獻身的御行動の如き、皆これである。歴代天皇の勅語の中に表はれた御詞にも、祖宗に對する御責任より、現國家の美化、淨化、善化を御天職となさせられる、祖

宗に對し將又國家に對する、實に純眞な忠誠の御精神を拜
 することが出来る。

抑、天皇皇族が國家に御忠節を御盡くし遊ばされる事と、
 國民が國家皇室に對して忠純なる事とは一に歸して、祖宗
 の遺訓を恢弘にする所以であつて、君民忠節の對象は祖國
 自身であり、國體自身であり、更に語を換へて言へば、國家人
 格の發揚と云ふ一事が、君民の同始祖たる皇祖皇宗の遺訓
 (即ち民族的理想)によつて統括されてゐる。これが他邦の
 追隨を許さぬ重大點である。

(七)

要するに、現今日本の思想界は紛糾してゐる。しかし、こ

れは正に、新しき思想を産まんとする序曲としての紛糾で
 あり、寧ろ秩序ある紛糾である。もしこの潜勢力ある紛糾
 の眞相を究めずして、輕々に事を斷ずるならば、その結果は
 却つて、日本の偉大性を完成する障礙となるであらう。

嗚呼、人類この地上に生じて數萬年、東西の二大文明の生
 じて數千年、この二者が日本なる東海の列島に相會して數
 十年なるを考ふれば、日本の思想界の紛糾するのも寧ろ當
 然であらう。さうして、この紛糾を姑く第三者の地位に立
 つて大觀すれば、寧ろ思想界の大壯觀である。

急流相會する所、波濤高く騰り、潮勢相回る所、渦旋深く沈
 むやうに、日本の思想界は現に沸き立つてゐる。

*法學士
宮内省御用掛

この荒海を乗り切るを得るか否かは、只國民の自信と膽力との如何に由る。新忠君愛國者は必ず輩出するであらう。民族的自覺者ははや擡頭しつゝある。さうして、それ等の忠君愛國者、自覺者は古い忠君愛國者に對する一つの抗議者であり、同時に自國總體を凝視した復古論者であるであらう。

(二)*荒芳徳の文に據る

二 自然の寂光

秋から冬にかけての日本の空は、北及び西の歐羅巴に見られない清澄な輝かしさをもつてゐる。殊に氣候の變化の烈しかつた昨年の後半は日本の秋を一層あざやかに彩

つた。南歐に見る如き光ある日本の空は、いつもより一層紺青の色を深くし、輝く黄金の萬片をこの大空の下に翻してゐる、いかにも東洋らしい銀杏樹をして、いつもよりは一層おごそかな姿を、清澄の空氣の中に恣にさせてゐた。

輝く光は日本に住む者の悦びである。いかに砂塵と、不秩序と、喧騒と、焦慮と、疲労と、困憊との渦卷く日本の首都の上にも、この秋の寂光は、一道の清涼の氣を漂はせて、人々の胸の中にまで一時の靜穩を植ゑつけずには置かない。この寂光の隈なく行きめぐる秋の都、木の葉の吹きまくらるる中にも、地皮の細く碎けて舞ひ立つ風塵の中にも、一つの寂然たる不動の姿を見せて、いかなる喧騒をも取りしづめ

得る眞の生え抜きの大都會となるのはいつの事であらう。この秋の自然が人間化せられて、日本の首都が眞の秋の都らしくなる時はじめて我々の生活表現たる眞の都市が見らるゝであらう。

日本の澄み渡る寂光の十一月は、パリに於ては曇天のいぶせき天候のみの續く季節である。さらにロンドンならば最早濃い霧が全市を包んで、方三尺の世界しか我々は持ち得ない極めて窮屈な詫びしい時節である。パリのこの打續く曇天が破れて、時とするると一時の幻影の如く、郊外の森林の頂を黄色に染め出し、薄青い空をのぞかせ、忙はしげに響く衆鐘の合唱を都會の上に轟かせ、雲の中に途を失つ

て居た渡鳥の群を俄に元氣づかせ、慌だしい悦びを人々の胸に蘇らせることがある。また時とするるとロンドンの濃い霧が、一層濃くかたまつて雨となつた後などには、薄い日の光が、天の一方から落ちて、思ひもよらない街路の角の薄灰色の建物の壁を照らし出すことがある。路行く人は何か思ひも寄らぬ不思議なものに打當りでもしたやうに、けげんな眼をじつとその照らし出された壁上にやつたばかりで、黙黙として通つて行つてしまふ。

そんないぶせき都會にゐる日本人ならば、またそんな一時の光の戯れに接してもするならば、必ず秋の故國を思ふ。寂光の故郷を思ひ出す。日本人が他國に在つて思ひ出す

nostalgia
*
懷郷病

のは、この秋の光である。我々が持つノスタルジアはこの光、この寂光に對する思慕の情である。

我々は南方を慕ふ心を持つてゐるが、たぎり落つる目くるめく赤熱を戀ふるものではない。我々は北方を愛するけれども、闇の與ふる不氣味さ、恐ろしさ、殘忍さは好まない。赤熱の中に漂ふ静けさ、闇に浮かぶ微なる光、即ち寂光を求めてゐる。この寂光が奪はるゝ時、我々の心には一種の焦慮が生れる、混亂が生ずる、郷土思慕が胸の中をかき亂す、考が左行し右行して、落ちつきがなくなる。

澄みきつた濃藍の秋空が、目に見えぬ痙攣を起して巨きく波立つ。この動波は人間の中へ落ちて人々を漂はせる。

我々はその秋空の青い動波に動かされて、互に始めて相見
るものの如き心持をもつて眺め合ふ。

或時が來て、人間の心理の中に一つの大きな痙攣が一時に隆起する。それが我々をつつむ空氣を震撼せしめて、遠く廣がり、空に向つてさへものぼつて行く。

天と地との二つの巨きな動波が交響樂を立てて充溢する時、新しい世界が出現し、新しい表現が生れ出づる。

秋空を仰いで、我々はこの空の動波を痛感し、大地に立つて、我々は地氣が身を通して空に立ちのぼるのを覺える。

我々人間は、この天と地との兩界の動波を接合せしめ、感觸し具體化する使命をもつてゐるのであらう。人間の心

理の動波とは、實にこの大地の精氣が、我々の身軀を通じて立ちのぼる時の過程現象であるかも知れない。

我々の感官は今や驚くべき解放を受けて、相互の間にまた各人の間に、深刻な暢達した交通をなしつつある。此の感官をして一層解放せしめ、我々をして、常に天と地との交流する最も微妙なる機關たらしめねばならぬ。(吉江孤雁)

三 破 鐘

悲しくもまたあはれなり、冬の夜の地爐みろりの下に、燃えあがり燃え盡きにたる柴の火に耳傾けて、夜霧たつ闇夜の空の寺の鐘きゝつゝあれば、

過ぎし日のそこはかとなき物思やをら浮かびぬ。

喉太の古鐘きけば、その身こそうらやましけれ。

老らくの齡としにもめげず、健やかに忠まことなる聲の、

何時もいつも、梵音妙に深くして、穩おとなどかなるは

陣營の歩哨にたてる老兵の姿に似たり。

そも、われは心破れぬ。鬱憂のすさびごこちに、

寒空の夜に響けと、いとせめて、鳴りよそふとも、

覺束な音にこそたてれ、弱聲の細音も哀れ。

*文學博士
英文學者
文藝評論家

哀れなる臨終の聲は、血の波の湖の岸、
小山なす屍の下に、身動もえならで死する、
棄てられし負傷の兵の息絶ゆる終の呻吟か。
（上田敏）

四 人を動かす春色多きを用ひず

鐘の音霞む花の雲に、ひねもす人の山分けまどひて、さて
歸りて、わが家の一本櫻に春のまことのあはれを知るなら
ひぞかし。

ことし、秋は始めて垣根の薺花、へなくの露にすずしき
ころ、庭の片隅に打ちすてられたる古鉢の、去年の生命の一
粒を辛くも宿したるが、いつの間に萌え出てけむ、一尺ばかり

りなる蔓莖のやうく、力なげに青空にあこがれそめて、青
黄色したる薄葉二つ三つ著きたり、もとより心にもとどめ
でありけるが、ある朝ふと起き出してみれば、さばかりわびし
かりし蔓莖に、白き大輪の花ただ一つあはれ美しうも、け高
うも咲きつるかな、生命の通ひぢいとくるしきこの蔓莖に
して、天つ日影の恵いと薄きこの病葉にして、思ひきや、白一
點精彩奕々、露に輝き、光を含み、靈しき天地のこゝろを優に
咲きいでむとは、折からを垣根に咲き盛れる花のいろいろ
皆けおされし心地して、あはれこの花一つに心動きぬ。
これもことし、秋暮れつかた、掌ばかりの浅き鉢に星月夜
とかいふ野菊數株、まばらに植ゑ込みたるをさるかたより

おくりこしぬ。黄なる小輪の花七つ八つ、頭そろへて、何ごとをか、打ちさゝやくさまの、いとしほらし。鉢に盛れる土にはおのづからなる、野らなんどのやうに蒼苔とこころどころに生へるが、尙視れば、そこにもさゝやかなる草花の一むら、自然の一廓を造りなしたり。われこの一撮土に生ふるはかなき草花に打ちむかふ折々、秋の花野の風情おのづから千里の外に動くを覺えたり。さて又、夜はそのほかなるかをりに屢、清冷の夢を織りなしぬ。

萬馬の蹄の下に、泥海なんどのやうに蹈みあらされし曠野の中にして、ある日、ひそかに大いなる自然の力を緑深う崩え出でて、色香もたへに咲きほこりたる一本小草の花を

*山路来て何やらゆかし葦草 芭蕉

芭蕉の句

見出でたる、誰かはその大膽にして歸依の心一すぢに高き姿を慕はざる。あるは山路の闇に行き暮れて、草枕わびしき旅人の、何やらゆかしき葦草の一本に、たま〜心躍りては熱き涙も下りぬべし。ソロモンの榮華を競ひし花のふるごとは、さらにも言はず、この夜の夢と悟りすてたる達觀の一併人をして、何の木の花とも知らず匂かなとやさしき心の一ふしを奏でいてしめたる花のこゝろの今更問はまほしく、さては西の國なる高調の一詩人をして路のべのいともあやしき草花だに涙に餘る深き思を湛ふと、咏み出でしめたる言の葉ぞ、想ひ出でらるゝ。

山高きが故に貴からず、花驕れるが故に妙ならず。 籬落

に著き、流水に漂ふ名もなき小草の花にだに、われらが拾ふべき力と榮と詩と惠とは、いとさはにはあるをや。

倫理學者宗教學者

(綱島梁川)

五 藥師寺

金堂へは裏口からはいつた。再會のよろこびに幾分心をときめかせながら堂の横へ廻はると、まづかの脇立のつやつやとして美しい半裸の體が、我々の眼に飛び入つてくる。さうして、その巨大な體を、上から下へと眺めおろしてゐる瞬間に、柔かくまげた右手と豊かな大腿との間から、向うに坐つてゐる我が藥師如來の、とろけるやうな美しさを

持つた横顔が、また電光のす早さで以て我々の眼を奪つてしまふ。我々は急いで本尊の前へ廻る。さうして暫くはそこに釘づけされたやうになつてゐる。——やがて、自分の足が體を支へきる力を失つたやうな奇妙な感じに襲はれる。——丁度そこに床几がある。我々は腰をおろして、またぼんやりとしてしまふ。

確にあの雄大で豊麗な、柔かさとは強さとの抱擁し合つた、圓満そのもののやうな美しい姿は、我々の心をとかし切る力を持つてゐる。胸の前に開いた右手の指の、とろつとした柔かな光だけでも、大慈大悲の涙がそこに露となつて光つてゐるといふやうな、我々に縁遠い比喻さへ、切實な表現



藥師佛像

として感ぜしめるほどに、我々の心を動かすのである。況やあの豊麗な體軀は、——蒼空の如く清らかに深い豊かな胸美の秘密を擔つてゐるやうな力強い肩、その肩から胸と腕を傳つて下腹部へ流れ
藥る微妙に柔かな衣、さうし
師てこの宇宙の如き上體を
佛極度に靜寂な調和のうち
像に安置する大らかな結跏
の形——すべての面と線
とに滾々として盡きない美の泉を湧き出させてゐる。それは我々が希臘彫刻の寫眞を見て感ずる、あの人間の美し

さではない。そこには人間らしい願望の最高の反映として、理想的な美しさが現れてゐるが、こゝには彼岸の願望を反映する超絶的な或者が、人間の姿をかりて現れてゐるのである。現世を假幻とし、眞實の生をその奥に認める宗教的な心情から、一つの具體的な神像が生れなくてはならなかつたとすれば、このやうに超人間的な香氣を強くするのは避け難いことであつたらう。その心持は更に頭部の美に於て著しい。その顔は臉の重い、鼻の廣い、輪廓の比較的に不鮮明な、蒙古種獨特の骨組を持つてはゐるが、しかもその氣品と威嚴とに於ては、いかなる人間よりも勝れてゐる。希臘人が東方の或民族の顔を評して肉團の如しと言つた

のは、或點では慥に當つてゐるかも知れぬが、その肉團からこのやうな美しさを輝き出させることの可能は、彼らの知らないところであつた。あの頬の奇妙な圓さ、豐滿な肉の言ひ難いしまり方、——肉團であるべき筈の顔には、無限の慈悲と聰明と威嚴とが浮かび出てゐるのである。何人もあの僅かに見開いた切れの長い眼に、大悲の涙の湛へられてゐることを感じないものはなからう。あの頬と唇と顎とに光るとろりとした光のうち、無量の叡智と意力とを感ぜぬものもないであらう。慥にこれは人間の顔でない。その美しさも人間以上の美しさである。しかし、この美を生み出したものは、依然として、寫實を乗

り越すほどに寫實に秀でた藝術家の精神であつた。彼らは下から人間を形造ることに練達した後、始めて上から神を造る過程を會得したのであらう。自然の美を深く擲み得るものでなければ、——またその擲んだ美を鋭敏に表現し得るものでなければ、内に渦卷いてゐる想念を結晶させて、それに適當な形を與へることは出來まい。もとよりこの作は模範のないところに突如として造られたものではない。その想念の結晶も初發的のものとは言へない。しかし模範さへあれば容易にこの種の傑作が造り出されると考へるのは、藝術創作の事情を解し得ない人のことである。これほどの製作をなし得る藝術家は、たとへ目の前

に千百の模範を控へてゐるにしても、なほ自分の目を以て美を擲み、自らの情熱によつて想念を結晶させるのでなく、ては、決して製作し得るものでない。羅馬に於ける希臘彫刻の摸作を知るものは、いかに巧妙な摸作もなほ中心の生氣を缺き表面の新鮮さを失つてゐるに氣づくであらう。そのやうな鈍さが我々の藥師如來の何處に現れてゐるか、あの生命の溢れた、今生れたばかりのやうに新鮮な我々の傑作に。

とにかく、この像を凝視してほしい。あの眞黒なみづみづした色澤だけでも人を引きつけて離さないのである。しかもその色澤がそれだけとして働いてゐるのではない。

その色澤を持つ面の驚くべく巧妙な造り方が、實は色澤を生かしてゐるのである。さうしてその造り方には、銅といふ金屬の性質に對する十二分の理解が織り込まれてゐる。特殊な伸張力を持つた銅の、言はば柔い硬さが、藝術家の靈活な驅使に逢つて、あの美しい肌や衣の何とも言へず力強い滑かさに、——實質が張り切つてゐながらとろけさうに柔い、永遠に不滅なもの、の硬さと冷たさとを持ちながら、而も觸るれば暖かて、握りしめれば弾力のありさうなあの奇妙な肌のところもちに、——化し去つてゐるのである。が、このやうな銅の活用も、人體の美に對するこの作者の驚くべき理解がなくては可能でない。あの開いた右手を見よ。

あの肩から肱へと左の腕を包んだ衣の流れ工合を見よ。それは單に一端である。しかしそれだけでも、この作者の目が何を見てゐたかはわかる。——が、この作者の見た人體の美の深さは、まだこの作の奥底ではない。誰も氣がつくやうに、そこにはなほ著しい選擇と理想化とがある。作者はその想念に奉仕するために、ある種類の美を表にし、他の種類の美を陰にした。さうして、その想念の結晶を完全な調和に導くために、或者を強調し、或者を抑へた。かくしてこの作者の造り上げた部分の形の美しさは、一に全體の美の力によつて生かされ、そこから無限の生氣と魅力とを得て來るのである。果然、奥底には藝術家の精神があつた。

*文學士
京都帝國大學助教
授

(和辻哲郎)

六 新時代の 大問題

毎年梅雨の季節には霖雨がある。霖雨が過ぐれば洪水がある。洪水があれば田や畑が浸る。かくて、洪水は災害と共に豊かな肥料をも田畑に残して行く。

大河の沿岸には二重にも堅牢な堤防を築いた上に、家々には萬一の氾濫に備ふる準備までしてある。それで尋常の霖雨には洪水の憂はなく、多少の氾濫にはさしたる災害は被らぬ。併し霖雨が豫期に反して劇しく又長く續けば、時々刻々に増し來る水量は彌が上に嵩んで、晝夜村民の警

戒する甲斐もなく、堤防を決潰して、見渡す限りの田野を浸し、滔々たる濁流は一瀉千里の勢を以てあらゆるものを洗ひ去る。斯かる時は、かねての用意も殆ど何の用をもなさぬ。是に於てか、下流の堤防を切つて水を流せば、さしもの洪水も數日の内には減く。

さてまた、大洪水の退いた跡は洵に慘憺たる状況である。幾十百町の田地は土砂を被つて不毛の地となる。人は累代の財産を失うて忽ち糊口に窮するのである。それで有司は直ちに其の善後の策を講ずる。先づ第一に著手さるべき事は崩壊した堤防の改造である。元の場所に一層堅固な堤防を作るも一案であらうが、水勢を稽へ、水路を更め、

新に放水路を作り、河底を浚渫するが如き、一層根本的な改造工事をも必要とするであらう。堤防の改造に多くの研究を重ぬべきは勿論、荒らされた田畑の復舊工事には多大の労力を要し、洪水に對する家々のかねての用意にも新たな攻究を要するであらう。

最近四箇年餘の長きに亙つた歐洲大戦争と、其の後の世界の状況は、實に上に述べた大洪水と災後の光景に彷彿たるものがある。大洪水の慘禍が水路や堤防等の改造問題を惹起するやうに、大戦争は社會・經濟・政治等の上に多くの改造問題を將來した。人類は如何なる境遇に遭遇しても、是に適應して一層幸福なる生活状態を作り出さうと努力

して已まぬ自然の要求を持つてゐる。大戦争が與へた惨害、是に處した交戦國民の必死の努力は、從來の經濟組織・社會組織・政治組織に就いて深刻なる考察を下さしむるやうになつた。此の深刻な考察は根強い自覺を促して、爰に世界の思想界に種々の難問題を提起した。

世界の民族は凡て申合はせたやうに共通の要求を提出して、急轉直下の勢を以て思想界の大潮流を作り出した。是が現代思潮の要求である。現代思潮の要求の根柢には、人類が開明の域に入つて以來、人智の限りを盡くして文化の發達を圖り、人類の幸福を増進せんとした努力と同一の努力が横たはつて居る。即ち今日まで少しづつ實現され

て居つた理想を一氣呵成に實現せんとするのである。余は是を現代思潮の正流と認むる。改造・解放の叫びや運動や、世界のあらゆる國に人心を動かしてゐる。大戦争以前に於ては、假令企てても、因襲や舊思想の力で容易に實行の出來なかつた革新や改造が、世界の此の大勢に押されて直下の勢で成し遂げられてゐる。多年の懸案として智者識者の頭腦を悩まして居つた難問題が、一朝にして造作もなく解決されたのもある。ともかくも、社會の各階級に於ける富や名譽や權勢や吉凶禍福の分配の標準が著しく變動して、社會を動かす實力の中心が何時の間にか移動し始めて、得意の順調に乗じて揚々たるものもあれば、失意の悲

境に沈み果ててゐるものもある。斯うして、新しい社會問題や經濟問題等が猛烈な勢を以て擡頭して來た。

現在の世界は大戦争なる大水害の跡始末をつけて居らぬ。破壊された堤防の改築や、埋没した田畑の修復や、押流された家屋の新築やが竣工して居らぬ。否、是等の改造の方針に就いて議論が未だ一致しない有様である。さし當つての跡始末は遠からず出來上るであらうが、さて其の上で立つべき、將來の大洪水を豫防して、住民の平和幸福を堅固ならしむべき根本的の施設に就いては、更に大いに攻究すべきものがある。其は水源地の植林の事である。如何に水路を考究しても、また如何に堅固な堤防を築いても、若

し水源地の植林を等閑に附して置くならば、洪水の氾濫は皆無を期することは出來ぬ。現今の社會組織其の他の百般の改造問題は、畢竟洪水に對する堤防の改造問題に比すべきものである。水源地の植林に比すべき根本問題はなほ此の外にある。其は何であらう。民族生存の問題である。

若し民族の生存其自身が危くなれば、其の生活の形式に過ぎぬ社會問題の如きは、何等の意義をも有せぬことになつてしまふ。社會問題の解決は、先づ民族生存の安定を豫想し、是を背景とせねば、到底不可能であり、又無意味となる。人類は民族を單位として、始めて生存を完了し其の幸福を

増進することを得るものである。而して民族の生存には是を生存せしむる生命がある。此の生命は言ふ迄もなく、祖先より代々相承して同族の血管を溢流せる民族精神である。此の民族精神の手入れがやがて水源地の植林に相當する。此の根本方策を忘れて改造問題の論議のみに没頭するものは、本を忘れて末に走るものである。民族精神は民族生存の生命である。民族精神が旺盛であり、其の踏む道が正義人道に適へば、民族は必ず繁榮する。是に反して、民族精神が銷沈して、行く可からざる途を行けば、民族は衰微せざるを得ぬ。世界各国の民族精神が一致して旺盛であり、均しく正義人道を守れば、人類全體の幸福は増進せ

ねばならぬ。是に反して、世界各国の民族精神が孰れも銷沈して、正義人道を無視してしまへば、人道は災を被らざるを得ぬ。若しまた正義人道を踏まずして、恣に民族精神のみを鼓舞し、偏狭なる愛國心が熱烈になれば、動もすれば他民族を侵害して、延いて人類の災害を來す。又民族精神が萎靡振はずして、只管正義人道のみを唱へても、國際競争の劇烈な今日の狀勢の下では、結局空虚無力なる弱者の聲となつてしまふのである。斯く考へて來れば、民族精神を振興して、正義人道を踏ましむることは、民族を繁榮せしめ、人類の幸福を増進する萬全の根本策といはねばならぬ。是が世界改造の根本であらねばならぬ。改造問題も急務で

あるが、民族生存の根本問題は更に急務である。

(野田義夫の文に據る)

*
文學博士
教育學者
大阪高等學校長

七 西行法師

*
右近衛大將源賴朝
鶴岡八幡宮。

文治その年の八月十五日、鎌倉の大將殿鶴岡の宮居に
まうでさせ給ふ。例の事にて、御供仕うまつる人人、御前お
ひ、御あとべ仕うまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴のあゆみして、疾か
らず、遅からず、つらを亂さず練りいでさせ給へるを、大路に
膝折り伏せ、かしくみたいまつれる人、數ふべうもなく、數多
あるに、けいめいして、あなただにいはせず、世にいかめしく、
貴き御ありきざまなり。

*
周の文王が獲して
太公望に遇つた故
事



上 田 秋 成 陶 像

かへりまうしして、御手輿に召させ給ふほど、御階の忌垣
のもとに畏りをる法師のあなるが、見上げ奉る面つき、なほ
人にあらずとおぼしけむ、御輿ぞひの若侍して、問はせ給ふ。
ゆくりなきに驚きざ
しまして、雲水に、ありか
定めず侍るものにて、
名は圓位と申す。とい
ふ。聞し召されて、さ
ればこそ聞き知りた
れ。穴熊の、たけき獲物の類ならで、賢き人得たるためしに、
誘ひかへらむ。わがあとに連れて來れ。とて、召し連れさせ

給へり。

御館に入らせられ、御装束改めさせ給へば、やがて、大殿お殿とまら油あまた照らしかがやかさせ給ひて、おまし近き所の、一間なる簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、昔、藐姑射の山の御宮仕せし人、世をはかなきものに思ひなして、身は黒くやつしたれど、月花のなげきの譽は、物の心なき東人さへ聞き知りたるぞ。弓取る人の、もとの心の猛きには、よむ歌も直くあからさまと聞くはまことにか。武士のあらあらしき心には、詠みうつし得まじきものに、宮人達は沙汰し給へりとや。軍に出で立ちて、笛鼓の音、馬のいななきは、物とも思はぬを、この三十文字あまりのまなびには、心の後るる

*漢の高祖の故事
「大風起兮雲飛揚、威加四海、匈奴歸、安得猛士兮守四方。」
魏の曹操の故事
「月明星稀、烏鵲南飛、繞樹三匝、無枝可依。」

はいかに。「こは、かしこき御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代代の帝は、馬に鞍おき、弓矢とらして、軍に立たせ給ひし。その御歌をよみ奉れば、猛くすくよかに、調もいと高し



秋成の墓

とこそうち聞き侍れ。いでや、歌詠まむとては益荒雄心をとり隠し、あてに、なよやかに詠みうつすべくするこそ、この道のいみじき煩なれ。君が御心の敏く、たけきままにうちいで給はむには、今の人誰かは立ちあへ奉らむ。三尺の劔*を執りて、「大風起り、雲飛揚す」とうたひ、槊*をよこたへて、「烏鵲

南飛』と詠ぜし君達は、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや」といふ。

「人人、あれ聞き給へ。世は捨てたれど、たのもしき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓矢の上手となむ聞ゆる。傳へたることもあるべし。かくこそと思ひし、ぬることは忘れずてこそあらめ。たとへ言にても、をしへ承るべし。こは、ますますおそれある御とはせなり。つは者の道、しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山をすみかの瘦法師にさへ、物問はせ給ふことのかしこさよ。向ひ奉りては、をこがましく、家のつたへなりなど聞え奉るべうも、覺え侍らず。まして、あり難き大宮仕をいなみ

奉り、親のいつくしみをさへあだなるものにして、年、僅かに二十五にて家をいでたるいたづら者の、弦びき一つだに心に留めしことも侍らず。このかたの御問免させ給へ」とぞ、額を板敷に摺りつけて申す。君笑み誇らせ給ひ、「口とく、心さとき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。物語今はとどめむ。人人と土器かほちひとりはやし、曉かけて遊ばむ。まれ人は、酒飲まざるべし。鹿し・猿の中に立ちまじりて、『歌詠め』といふとも詠むまじ。ただわが前に遊べ。風冷かなるにも、飽かずのみ、物きたなげに喰ひちらす人人は、暖かにもこそ。この火取法師に參らせよ」とて、白銀もて造りたる、猫のかたちしたるを取り傳へて、「君より賜ふ」とて、前に置きたり。鹿し・猿はなほ

心たけし。鼠をだにえ捉らぬ瘦法師が爲には、似つかはしき御賜物ぞ。とて、三度おしいただきぬ。

あした、御暇たまはりて立ちいづるに、御館の人やどりに、誰が殿のわらはべならむ、くくり袴の裾、朝露に濡れそぼちて、いと寒げにをるを見て、「これ取らせむ。火埋みて、手煖めよ。」とて、かのきらきらしき物を與へて、かへり見もせず立ち去りぬ。主なる殿、「いとあやし。大將殿の法師に賜はせしを、いかで童に得させけむ。」とて、まづ急ぎて聞え奉る。君うちゑみ給ひ、かのえせ法師、あなづらはしく、をさなげなる物くれしとて、腹だたしくや思ひけむ、わが門の前に棄て行きつるよ。法師とて、男魂なくば修行もえせじ。されど、家を

*曹操の字

*心なき身にもあはれは知られけりしぎたつ澤の秋の夕ぐれ(西行)

出て、尙才に誇りて、野山にまじり歌詠みてのみあるは、世捨人の棄てらるべきあさましさぞかし。一度けがれし物、その童に取らせよ。とて、取りおろさせ給ひぬ。

西行、後にこの夜の事を人に語りていふ。「右府は、まことにねぢけたる君なり。口に蜜のごと宣へど、心には針のおはするぞ。漢高の大度、曹孟徳の智略あるに似て、天下の人、皆この君の網の中に入れられたるは、わが佛の冥福といふことを、生まれながら得させけむ。ただ悲しむべきは、神の御裔の、この後やうやう衰へさせ給はむ世の姿なるは。」とて、涙とどめ難くして物語りぬとなむ。心なき身にも、これを聞き傳へては、秋の夕暮ならずも、うちひそみぬべし。

*徳川時代の國學者
又小説家

八 元祿風 (俳句)

(上田秋成)

雲雀より空に休らふ峠かな。 松尾 芭蕉

あらたふと青葉若葉の日の光

五月雨を集めてはやし最上川

枯枝に烏のとまりけり秋の暮

荒海や佐渡によこたふ天の河

元日や家に譲りの太刀はかん。 向井 去來

上り帆の淡路はなれぬ汐干かな

おうくといへど叩くや雪の門

鶯や茶の木畑の朝月夜。 内藤 丈草

取りつかぬ力で浮かむ蛙かな

水底の岩に落ちつく木の葉かな

梅一輪々々ほどのあたゝかさ。 服部 嵐雪

黄菊白菊その外の名はなくもがな

蒲團着て寝たる姿や東山

猫の子のくんづほぐれつ蝴蝶かな。 榎本 其角

越後屋に絹裂く音や衣更。
夜着を着て歩いて見たり土用干。

九 奥の細道抄

(一) 松島

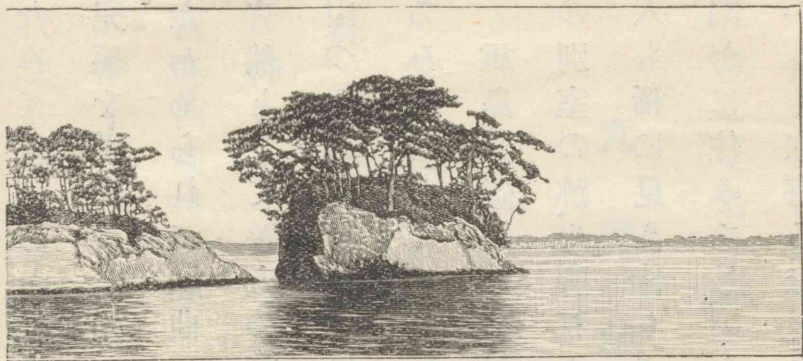
日既に午に近し。舟を借りて松島に渡る。其の間二里餘。雄島の磯に着く。

抑ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・西湖に恥ぢず。東南より海を入れて江の中三里、浙江の潮をたふふ。島々の數をつくして、欵つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ふ。あるは二重にかさなり、三重にた

たみて、左にわかれ、右につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹きたわめられて、屈曲おのづからためたるが如し。其の景色杳然として美人の顔をよそふ。ちはやぶる神のむかし、大山つみのなせる業にや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞をつくさん。

雄島が磯は地つづきて海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた松の木蔭に世をいとふ人も稀に見え侍りて、落穂・松笠など打ちけふりたる草の庵閑かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづなつかしく立寄るほどに、月海にうつりて晝のながめ又あらた

清衡・基衡・秀衡



なり。江上に歸りて宿を求むれば、
窓を開き二階を作りて、風雲の中に
旅寐するこそ、あやしきまで妙なる
心ちはせらるれ。

松
松島や鶴に身をかれ

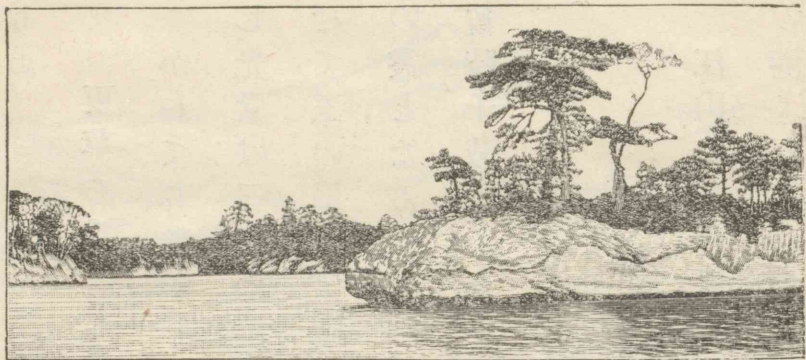
ほとゝぎす。 曾 良

島

(二) 平泉

心細き長沼に沿うて、戸伊摩とい
ふ處に一宿して、平泉に至る。其の
間廿餘里ほどと覺ゆ。三代の榮耀
一睡の内にして、大門の址は一里此

國破山河在城春草
木深（杜甫が春望
の詩の一節）



部

方にあり。秀衡が迹は田野に成り
て、金鷄山のみ形を残す。先づ高館
に上れば、北上川南部より流るゝ大
河なり。衣川は和泉が城を回りに、
高館の下にて大河に落入る。泰衡
等が舊跡は衣が關を隔て、南部口を
さし固め、夷を防ぐと見えたり。さ
ても義心勝つて此の城に籠り、功名
一時の草叢となる。國破れて山河
あり、城春にして草青みたりと、笠う
ち敷きて時の移るまで涙を落し侍

りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡。

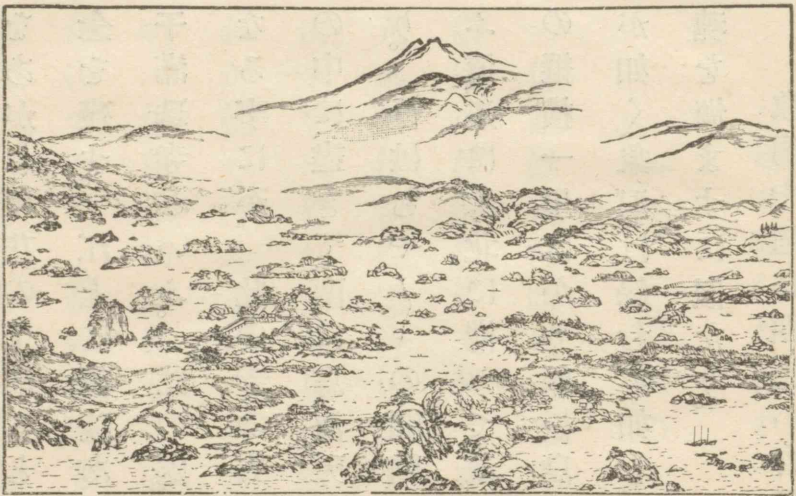
かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を
し、光堂は三代の棺を收め、三尊の佛を安置す。七寶ちり失
せて、玉の屏風に破れ、黄金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢、空虛
の叢となるべきを、四面新に圍みて、薨を覆うて風雨を凌ぐ。
暫時千載のかたみとはなれり。

五月雨のふりのこしてや光堂。

(三) 象潟

江山水陸の風光、數を盡くして、今象潟に方寸を責め、酒田
の港より東北の方山を越え、磯を傳ひ、砂を踏みて、其の際十

*水光激瀟晴偏好、
山色朦朧雨亦奇、
(蘇東坡が西湖の
詩の一節)



里、日影や、傾く頃、汐風眞砂
を吹きあげ、雨朦朧として鳥
海象の山隠る。闇中に摸索し
て雨も亦奇なりとせば、雨後
潟湯の晴色又頼もしと、蟹の苫屋
の象に膝を容れて、雨の晴を待つ。
古 其の朝天よく晴れて朝日花
圖 やかにさし出づるほどに象
潟に舟を浮かぶ。まづ能因
島に船を寄せて、三年幽居の
跡をとぶらひ、向うの岸に船

*象潟の櫻は波に埋もれて花の上こゝ海人の釣舟(西行)

をあげれば、花の上漕ぐとよまれし櫻の老木西行法師の記念を残す。江上に御陵あり、神功皇后の御陵といふ。寺を干満珠寺といふ。此の處に行幸ありし事未だ聞かず、いかなる事にか。此の寺の方丈に坐して、簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさへ、其の影うつりて江にあり。西はむやゝの關路を限り、東に堤を築きて秋田に通ふ道、遙に海北に構へて、波打ち入るゝ所を汐越といふ。江の縦横一里ばかり、倭松島に通ひて、又異なり。松島は笑ふが如く、象潟は怨むが如し。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。

*欲把西湖比西子、淡粧濃抹也相

象潟や雨に西施が合歡の花。

宜。(前出東坡が詩の一節)

汐越や鶴はぎ濡れて海涼し。

(松尾芭蕉)

一〇 芭蕉の生活

俳諧は室町時代からあつたものであるが、其の時代の俳諧は滑稽・遊戯の文學であつた。寂さびの文學としての俳諧は、元祿時代の松尾芭蕉から始まると言つてよい。尤も寂の由來を求めれば、源泉は遠い。其の遠い源泉から絶えぬ流れが續いてゐるので、必ずしも芭蕉に始まつたものではない。俳諧生活の特質としての寂を考へるには、芭蕉から澤山である。寂の特性を知るには、芭蕉の俳諧の特質を調べなければならぬ。之を知るには、芭蕉の生活を調べて見

なければならぬと思ふ。

一言にして評すれば、芭蕉は人格的な詩人である。初期貞門の俳諧を學んで居た時は、低級な遊戯的の俳諧家であつたが、それから晩年の大成期に至る迄に、彼の藝術は數度變化した。これは變化に富んだ彼の生涯に、彼の人格が磨かれて、次第に偉大をなしたものである。彼の生涯が、人格の大成、生活の眞意義をもとめて怠らなかつた生涯である如く、彼の一代の藝術にも努力の跡を留めて、一步々々高く大きくなつて來てゐる。芭蕉の學殖や禪の修養といふことが、彼の人格と俳諧とを大成する助となつたことは疑もないが彼の日常の生活そのものが、亦それ以上に與つて力

あるものであつた。彼の藝術には、常に彼の人格の光が射し、努力の痕が見えて居る。そこに、普通の俳人の作品に較べて、遙に侵し難い權威がある。彼は晩年自分の生活を顧



みて、無能無才にして此の一筋に芭蕉といふのは俳諧である、藝術である。此の一筋の意は、唯生活の方便として、已むを得ず俳諧の藝術に携はるといふ淺薄のものでないこと、彼自身の生活と藝術との間にもつと密接の關係を保つことを言つたのである。一言にしていへば、心を俳諧にする

といふことである。此の二つは、彼にとつては偶然の關係では無く、寧ろ必然的な、離さうとしても離されない、深い關係に立つものと思はれる。彼にとつては、俳諧を作ることが、彼の生活の方便でもあつたけれども、同時に彼自身の生活を作り上げて行くことであり、又彼の人格を大成して行く道であつた。彼の俳諧の特質の寂は、獨り彼の俳諧の特質でなく、彼の生活の特質であり、彼の人格の光であつた。

彼の傳記を案じ、彼の實際の生活を見ると、彼は現實のあらゆる慾望から退いて、自分の心身を安く清くせんとしたものと見える。さうして、其處に心身の安易なる生活を見出ださうとした。功名富貴といふ様な現實の桎梏から離

れて、纔に膝を容れるばかりの陋屋に住み、友人や門人達の惠む衣服・食物を以て満足しようとした。衣服も寒暑を凌ぐを程度として、たとひ柔い絹物は惠まれてもこれを謝絶して居る。食物も生命を繋ぐを以て満足しようとしてゐた。酒を飲んでも、無論肴に贅澤を言はない。かく慾望を

るに、
居るに、
酒を飲んでも、
無論肴に贅澤を言はない。
かく慾望を

退けて、現實の煩瑣を避け、自然の儘の簡易について、其處に静かな安らかな心持を味ははうとして居たのが彼の生活である。閑寂にして物に役せられず、拘束されない生活を樂しみ、そこに人生の妙趣を見出さうとして居た。彼が最

も私淑した古人は西行法師である。西行に私淑して居たのは、獨り西行の歌を愛したのみでなく、西行の人格とその簡易な放浪生活とに深い共鳴を感じて居たものと思ふ。かく言へば、芭蕉の生活は全く隱遁的のものであり、退嬰的のものであり、消極的のものである。従つて彼の寂といひ、閑寂といふのも、ただ自分の肉體精神の安易を享樂するといふ、極めて安價な生活に過ぎなかつたであるやうに思はれる。彼の生活は一つの享樂生活であり、彼の俳諧も亦享樂的のものに過ぎないことになるが、私はも少し深く考へて見て、彼の生活が單に享樂的のもので無く、同時に彼の俳諧の寂も、も少し深みを持つたものと考へる。

彼には更に進んで、自然の懷に走り、自然の生命を擱んで、それによつて人間生活の内容を向上させようとする態度があつた。芭蕉が自然に走つたのは、ただ都門の生活の競争場裡に没頭した俗人が、時々都門の煩雜を別莊に避けて、山水の間に閑適を貪らうとする様な淺いものでは無い。彼は自然に對する深い憧れを持つて、自然の底の底まで達して、其處に自然の生命を擱まうとしたものである。譬へば「古池や蛙飛込む水の音」閑かさや岩にしみ入る蟬の聲「或はよく見れば薺花咲く垣根かな」明月や池をめぐりて夜もすがら「等」人口に膾炙した名吟を味はへば、文字の上に表れた自然は、ありふれたつまらぬものである。併し、是等の句

を通じて、芭蕉が自然の奥に潜んでゐる微妙の響に耳を澄して居た態度、ちつと自然の神髓を見つめて居る態度、自然の中に自分を投込んでゐる態度を見なければならぬ。

芭蕉の言葉に

それ天地は風雅なり。萬象も亦風雅なり。

と云ふのがある。風雅は自然の美趣といふものであらう。これは天地萬象の中に客觀的に存在するものではなく、自然に對する人の主觀の中に、又は其の態度の中に見出されるものである。自然を研究する科學者に對しては、自然は風雅ではない。自然の美を求め、自然の生命を探る人に取つて、始めて風雅といはれるであらう。芭蕉がその私淑し

た西行法師の像に、

すて果てて身は無きものと思へども、

雪の降る日は寒くこそあれ、

花のふる日は浮かれこそすれ。

と贊した。此の添加された芭蕉の一句を得て、此の言葉が西行の原歌以上に深い味はひを持つ様になつてゐる。世を捨てて出家した身にも現實の苦しみはある。西行の歎きは其處にとどまるが、芭蕉はそこに一步を進め、現實を離れようとするものにも、自然の美、自然の生命に觸れては、自ら心の躍動することを禁じ得ない心持のあることを加へたものと思ふ。此の浮かれる心は自然に陶醉した心持で、

即ちそれが彼の所謂風雅の情であらうと思ふ。
猶彼の文に、

風雅に於けるもの、造化に従ひ四時を友とす。見る所花
にあらずといふことなし、思ふ所月にあらずと云ふこと
なし。形、花にあらざる時は夷狄に等し。心、月にあらざ
る時は鳥獸に類す。夷狄を出て鳥獸を離れて、造化に従
ひ造化に還れとなり。

ともある。造化といふ言葉は、自然の生命或は自然の意志
と見るべき言葉と解する。四時といふのは、其の生命の形
に表はれた現象の自然である。四時に應じて變化するの
が自然現象のならひであるから、これを四時と稱へたので

あらう。故にこの引用句の意味は、自然をば、自然の意志の
儘に、其の現象を見て友とせよ。自然を征服し、利用すると
いふ考を離れて、自然のありの儘に接し交はり、さうして自
然の生命を捉へよ。さうすれば、あらゆる自然の現象は、悉
く花ならぬはなく、月ならぬはなく、自然の美趣は我等の前
にあらはれ、かくして自然の美を樂しみ得る所に、人間が夷
狄・禽獸と違ふ尊さがあるのである。それが即ち風雅であ
る。其の風雅を知らぬ者は、人間でなく、人生の眞の味はひ
を知るものではないといふことになる。此處までならば、
やはり彼は自然の享樂者に過ぎない様であるが、最後の句
に「造化に従ひ、造化に還れ。」と宣言してゐる。これは西洋の

「自然に還れ。」の叫びである。人間が昔から今日まで自ら作りあげたあらゆる桎梏・拘束を離れて、それ等の爲に變形せられた人生の姿から脱出して、人間本然の姿に立歸れといふことは、彼の生活に對する理想であつた。こゝに至れば、自然の享樂には止まらないのである。人生の此の大理想を一句の上に表はしたのが、かの

もろくの心柳にまかすべし。

の句であらう。これは芭蕉の理想である。それがために「任すべし」とはいふのであらう。人生の悲しみなどの一切の心をあげて、これを大自然に任せて、自然に歸れといふ叫びを、此の一句に表はしたものであらう。人間の智識・學問

を以て、無理に自然に抗すること無く、自然に合致した新しい生活を求めた彼の心を、此の一句に表はしたのであらう。芭蕉が極端の貧乏に處し、雲水の生活に身を任せて居たのは、外面的には無爲の生活の様であるが、内面的には複雑な積極的な意味があることは、右の句から考へ得られると思ふ。かく芭蕉は自然に復歸することを求めた、彼の大理想を成遂げ得たかといふにもとより成遂げ得なかつた。唯理想を求めて努力した其の跡をば、彼の藝術に残してゐる。此の大なる理想は、絶えず人間の大なる理想として残り傳はり行くべきものである。此の理想を追求して、絶えず眞摯の態度を以て努力を續けた間の彼の心の動搖が、彼の藝

術であると思ふ。彼の俳諧が享樂的の俳人が、自然を樂しんだ俳諧と撰を異にするのは此處にあるのである。

然らば芭蕉は、自然の生命、大自然の造化をば、どういふ風に解釋したか。芭蕉は哲學者ではない故、何とも之に就いて説明を残して居ない。又之に對して宗教的の禮拜祈願をしても居ないが、彼は常に自然に接し、これを唯現象として見て止むことが出来なかつた。自然の現象を見つめる毎に、現象の奥深く隠れてゐる生命を見出して、それに造化の名を命じたのである。そしてそれに絶えず憧れの心を捧げ、現象の奥深く隠れてゐて、俗人の容易に認めることを許さぬ自然の生命を認めて、之を幽玄といふ言葉を以て表

はしてゐる。それと共に、又現象は千變萬化するけれども、其の生命は萬古不易寂然不動の姿をなすことを認めて、閑寂といふ語を用ひてゐる。即ち造化は幽玄にして閑寂なるものといふのが、芭蕉の自然觀の根本であらう。世間に傳へて、「古池や蛙飛込む水の音」の句は、芭蕉の蕉風開眼の句といふは恐らく附會の説であるが、この一句が芭蕉の俳諧の眞髓を得た句であり、芭蕉の會心の一句たることを是認することは不當でないと思ふ。一日芭蕉が草庵に閑居して默然沈思してゐた際に、忽然として前の小さい池に蛙が飛込んで、其の水音が彼の鼓膜に響いたと想像してみる。しんとした天地の寂靜の中に、此の水音の唯一つの響が起

り、それが默想に耽つた芭蕉の心に觸れて、彼の主觀をかき起し、彼が常に憧れ、常に求めてゐた閑寂・幽玄の自然の眞の姿を、まざまざと眼の前に見た。さうして自然の生命はここだとはかり、何等の技巧を加へずに、此の心持を表現したのが此の句となつたと考へる。若し此の初五の「古池や」を、寶井其角が技巧的に「山吹や」と置き代へた通りにすれば、此の句は全く變化してしまふ。又若し是に「閑かさや」といふが如き、心持を限定した句を加へ得るとしたならば、此の一句は大いに深さを減じて、文字に表はされたそれだけの句とならう。「古池や」といふ、何等の技巧を持たぬ有りの儘の心をおいてあるから、全體の句は寧ろ暗示的になり、短刀直

入に我等の主觀に薄つて來るのである。さうして何らかそこに深い或ものが句の中に潜んでゐることを思はせ、それが自然の祕密の謎である様に思はせる。寂靜中の一つの響が、天地の祕密を解く鑰となつて、我等の心に或默會が起つて、成程自然は幽玄・閑寂であるといふことに、否み難い同感を持たせるものであると思ふ。

かく見て來れば、芭蕉は現實に對しては消極的・退嬰的なことを免れぬが、自然には積極的で、進んで自然の眞相を開き、自然の奥まで行つて、その生命を擱まうとした人である。現實に對しては、芭蕉は温情は持つてゐたが、熱意は持つて居なかつた。自然に對しては、實に燃ゆるが如き熱意

がある。一切の慾望を棄てて自然の懷に赴いたのは、此の熱意に由つたものと思ふ。さうして自然と人生とを結合することによつて、其處に新たな人生の理想を見出して、自然に還れ。の叫び聲を揚げてゐるのであらう。さうして見れば、自然と人生に對する此の如き態度から産み出された彼の生活は、徒に無爲なる生活とは言へない、内容の無い空虚の生活とは言へない、倦怠した生活とは言へないのである。少くとも、其處に充實性と緊張味とを失はなかつた生活であると思ふ。よし現實に退嬰的・消極的であつたとしても、現實にとらはれないから、彼の心境は他の因襲に拘束された俗衆と違ひ、大いに自由であつたといはねばならぬ。

この自由の心をもつて、芭蕉は一途に此の自然に向つて走り、その生命を擱まうとしたのである。芭蕉の眼前には、自然は單に自然として現はれず、造化として現はれた。春夏秋冬に變化して、而も刹那も止まらないで、永遠に渉る不易のものとして現はれた。斯うして芭蕉の生活は、外面的には消極的に無爲に見えても、内面的には可なり積極的の意味を持つてゐたと思ふ。彼の藝術が現實に對する教訓も智識も與へぬのは、芭蕉の生活が現實に退嬰的・消極的であつた爲であらう。彼の藝術が自然に對する無限の感銘を我等に與へ、更に永遠の人生に對して大なる暗示と慰藉とを與へるのは、これが爲であると考へる。

(藤村作)

一一 暮 鐘

森のねぐらに夕鳥を、
 麓の里に旅人を、
 静けき墓になきがらを、
 夢路の暗にあめ地を、
 送りて響く暮の鐘。

春千山の花吹雪、
 秋落葉の雨の音、
 誘うて世々の夕まぐれ、

劫風ともに鳴りやまず。

天の反響、地の叫び
 恨の聲か慰めか、
 過ぐるを傷む悲しみか、
 來るを招く喜か、
 無常をさとす訓めか、
 望を告ぐる法音か。

友高樓のおばしまに、
 別れの袂重き時、

露荒涼の城あとに、
懷古の思しげき時、
聖者静けき窓の戸に、
無象の天を思ふ時、
大空高く聲あげて、
今はと叫ぶ暮の鐘。
人住む處行く處、
嘆と死とのあるところ、
歌と樂とのあるところ、
涙悲しみ、憂きなやみ、

笑喜たのしみと、
互に移り行くところ、
都大路の花のかげ、
白雲深き鄙の里、
白波寄する荒磯邊、
無心の稚兒の耳にしも、
無聲の塚の床にしも、
等しく響く暮の鐘。
雲飄揚の身はひとり
五城樓下の春遠く、

都の空にさすらへつ、
思しのぶが岡の上
われも夕の鐘を聞く。
鐘の響に夕鴉、
入日なごりの影薄き
あなたの森にゐるがごと、
むらがりたちて淀みなく、
そぞろに起るわがおもひ。
静まり返る大空の、

波を再びゆるがして、
雲より雲にとよみゆく、
餘韻かすかに程遠く、
浮世の耳に絶ゆれども、
知るや、無象の天の外、
下界の夢のうはごとを、
なごりの鐘にきゝとらむ
高き、尊き靈ありと。
天使の群をかきわけて、
昇りも行くか無限の座。

鐘よ、光の門の戸に
何とかなれの叫ぶらむ。
下界の暗は厚うして、
聖者の憂絶えずとか、
浮世の花は脆うして
詩人の涙涸れずとか。
長く、かすけく、また遠く、
今はたつづく一ひびき。
呼ぶか、閻浮の魂の聲、
かの永劫の深みより、

「われも浮世のあらし吹く
波間に浮きし一葉舟、
入江の春は遠くして、
舟は半ばに沈みぬ」と。
恨みなはてそ、世の運命、
無限の未來後にひき、
無限の過去を前に見て、
われ今こゝに惑あり、
はた今こゝに望あり。
笑たのしみ、憂きなやみ、

暗と光と織りなして、
歌ふ浮世の一ふしも
いざ響かせむ暮の鐘。
先だつ魂に、來む魂に、
かくて思をかはしつゝ、
流一筋大川の
泉と海とつなぐごと。
吹くや東の夕あらし、
寄するや西の雲の波、
かの中空に集まりて、

しばしは共に言もなし。
ふたつ再び別る時、
「祕密」と彼は叫ぶらむ。
人生理想はた祕密、
詩人の夢よ、迷よと
わが笑ひしも幾たびか。
眞晝の光輝きて、
望の星の消ゆるごと、
浮世の塵にまみれては、
罪か、濁世か、われ知らず。

其の塵深き人の世の
夕暮ごとに聲あげて、
無限・永劫神の世を、
警め告ぐる鐘の音。
源流すでに遠くして、
濁波を揚ぐる末の世に、
無言の教宣りつゝも、
有情の涙誘へるか。
祇園精舎の檐朽ちて、

葦酒の香のみ高くとも、
セント、ソヒヤの塔荒れて、
福音俗に媚びぬとも、
聞けや、夕の鐘のうち
靈鷲・橄欖いにしへの
高き尊き法の聲。
天地有情の夕まぐれ、
わが驂鸞の夢さめて、
鳳樓いつか迹もなく、
花もにほひも、夕月も、

うつゝは脆き春の世や。
 尾の上に霞たちきりて、
 縫へる仙女の綾ごろも、
 袖にあらしはつらくとも、
 「自然」の胸をゆるがして
 響く微妙の樂の聲、
 その一音はこゝにあり。

天の莊嚴、地の美麗、
 花かんばしく星照りて、
 「自然」のたくみ替らねど、

煩累^{わづらひ}世々に絶えずして、
 理想の夢の消ゆるまは、
 たえずも響け、とこしへに、
 地籟・天籟身に兼ぬる
 ゆふ入相の鐘の聲。

（土井晚翠）

*名は林吉
 英文學者
 詩人
 第二高等學校教
 授

一二 尾形光琳

元祿時代は、文學のみでなく、繪畫の上にも亦一生面を開いた。若し其の時代を代表する者を求めば、尾形光琳・菱川師宣・英一蝶を數へねばなるまい。彼等は何れも其の各自の特長によりて、能く時代の精神を發揮してゐる。

尾形光琳は、必ずしも其の畫風に於て開山ではない。彼は寧ろ光悦や、俵屋宗達の足跡を辿つて、之を大成したものであらう。光琳の父は宗謙、宗謙は、其の父以來東福門院の御服所を務め、書を本阿彌光悦に學んだ。而して宗謙の祖母は光悦の姉であつた。されば光琳と光悦とは時代を隔てつゝも、其の脈絡は自ら繋がつてゐる。彼は狩野安信の門に入り、更に古土佐の風を慕ひ、轉じて光悦、宗達を學び、遂に一家を成した。されど彼が光悦や宗達に負ふ所の多大なるは、彼の畫を一見すれば、直に首肯せられる。

光琳の畫は、單に畫として存在するのみでなく、寧ろ一種の裝飾用の工藝品として存在する。彼が此の方面に於け

る意匠の豊富にして殆ど手腕の非凡なる、元祿時代の豪華は、鍾めて彼の掌中にありと言うても、溢美にあらざる感がある。

光琳の好んで描きたるは花卉の類で、人物畫には、伊勢物語の類が多くある。彼は時としては、水墨淡彩の草畫を作つたが、然も其の本色は、金箔・銀箔の上に濃艶・鮮妍なる彩毫を揮ふにあつた。而して彼の壇場は、細織の中に能く省筆し、穠澁の中に能く奇氣を寓し、絢爛の中に能く清新の致を保ち、優麗の中に能く豪放の氣分を發揮した。されば彼の畫面は如何に厚化粧しても毫も、鈍重・平板・凝滯の弊に陥らなかつた。

彼は造化を師とした。彼の描く所は、決して主觀的の物體ではなかつた。彼は寫生より入つた、然も亦寫生より出た。彼は實物に即した、然も實物に泥まなかつた。或者は餘りに忠實なる造化の臣となつた。或者は餘りに我意に一任した。然も光琳は、能く造化の忠臣たるも、その奴隸たらず。能く我意を遂行したるも、造化を無視せずして寧ろ其の補足に努めた。光琳の妙所は、此の造化を師として却つて之を驅使するに存した。彼の煥發せる才華の爲に目を眩まされたものは、往々彼を其の才華に任せた、人を欺く英雄の類と做すも、其の實は然らず。何れも彼の意匠慘憺の中より出て來らざるものはない。而して彼の苦心は

却つて其の一筆をも著けざる所に於て最も看取せられる。光琳は又、色彩の大家であつた。彼が裝飾的趣味は、其の色彩の使用に於て、最も發揮せられた。彼は此の方面に於て、光悦及び宗達を能く學んだ。而して彼が色彩を使用する殆ど其の手中に造化ありと言ふべき程であつた。即ち如何なる色素も一度彼の手を経れば別様の光彩を放つた。ただに彼は畫家としてのみでなく、又蒔繪師として、其の名工の名と其の名器とを後世に残し留めた。(徳富蘇峯)

十三 徒然草抄

(一) 柑子の木

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、或山里に尋ね入ること侍りしに、遙なる苔の細道を踏み分けて心細く住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるゝ、笥の雫ならでは、露おとなふものなし。闕伽棚に菊紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられるよと、あはれに見るほどに、彼方の庭に大きな柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばとおぼえしか。

(二) 同じ心ならむ人

同じ心ならむ人としめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなきことも、うらなくいひ慰まむこそ嬉しかるべ

きに、さる人あるまじければ、つゆ違はざらむと對ひぬたらむは、ひとりある心ちやせむ。互に言はむほどのことをば、げにと聞くかひあるものから、聊か違ふ所もあらむ人こそ、「我はさやは思ふ」など争ひにくみ、さるからさぞ。とも打語らば、つれづれ慰まめと思へど、げには少しかこつ方も、我と等しからざらむ人は、大方のよしなしごといはむほどこそあらめ、まめやかなる心の友には、遙に隔たりたるところのありぬべきぞわびしきや。

(三) 虚言

世に語り傳ふること、まことはあいなきにや、多くは虚言なり。あるにも過ぎて人は物をいひなすに、まして年月過

ぎ、境も隔たりぬれば、いひたきまゝに語りなして、筆にも書きとどめぬれば、やがて定まりぬ。道々の物の上手のいみじきことなど、かたくななる人のその道知らぬは、そぞろに神の如くにいへども、道知れる人は更に信も起さず。

音に聞くと、見る時とは、何事も變るものなり。かつ顯るるも顧みず、口に任せていひちらすは、やがて浮きたることと聞ゆ。又我もまことしからずは思ひながら、人のいひしまゝに、鼻のほどおごめきていふは、その人の虚言にはあらず、げにしく所々うちおほめき、よく知らぬよしして、さりながら、つまづま合はせて語る虚言は恐ろしきことなり。わが爲、面目あるやうにいはれぬる虚言は、人いたくあらが

はず。皆人の興ずる虚言は、一人「さもなかりしもの」といはむもせんなくて聞きわたるほどに、證人にさへなされて、いとど定まりぬべし。とにもかくにも、虚言多き世なり。ただ常にある珍しからぬことのまゝに心得たらむ、よろづ違ふべからず。

(四) 偽りても賢を學べ

人の心すなほならねば、偽なきにしもあらず。されど、おのづから正直の人などかなからむ。己すなほならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。至りて愚なる人は、偶、賢なる人を見て之を惡む。「大きなる利を得むが爲に、少しきの利を受けず、偽り飾りて名を立てむとす」と誇る。己が心に

違へるによりてこの嘲をなすにて知りぬ、この人は下愚の性移るべからず、偽りて小利をも辭すべからず。假にも愚を學ぶべからず。狂人のまねとて大路を走らば即ち狂人なり。悪人のまねとて人を殺さば悪人なり。驥を學ぶは驥の類、舜を學ぶは舜の徒なり。偽りても賢を學ばむを賢といふべし。

(五) 能をつかむとする人

能をつかむとする人、よくせざらむ程は、なまじみに人に知られじ、内々よく習ひ得てさし出でたらむこそ、いと心にくからめと常にいふめれど、かくいふ人、一藝も習ひ得ることなし。未だ堅固かたほなるより、上手の中に交りて、謗り

笑はるゝにも恥ぢず、つれなく過ぎてたしなむ人、天性その骨なけれども道になづまず、漫りにせずして年を送れば、堪能のたしなまざるよりは、終に上手の位に至り、徳たけ、人に許されて、ならびなき名を得ることなり。天下の物の上手と雖も、始めは不堪の聞えもあり、無下の瑕瑾もありき。されども、その人道の掟正しく、これを重くして放埒せざれば、世の博士にて萬人の師となること、諸道かはるべからず。

(六) 一道にたづさはる人

一道にたづさはる人、あらぬ道の席に臨みて、あはれ、我が道ならましかば、かくよそに見侍らじものを、といひ、心にも思へること常のことなれど、よにわろくおぼゆるなり。知

らぬ道の美ましくおぼえ、あらず美まし。などか習はざり
けむ」といひてありなむ。

我が智を取り出でて、人と争ふは、角あるものの角を傾け、
牙あるものの牙をかみ出す類なり。人として善に誇らず、
物と争はざるを徳とす。他にまさることのあるは、大いな
る失なり。品の高きにても、才藝のすぐれたるにても、先祖
の譽にても、人にまされりと思へる人は、たとひ言葉に出し
てこそいはねども、内心に若干の科あり。慎みて之を忘る
べし。をこにも見え、人にもいひけたれ、禍をも招くは、ただ
この慢心なり。一道にも誠に長じぬる人は、自ら明らかに
その非を知る故に、志常に満たずして、終に物に誇るることな

し。

一四 知と愛

知と愛とは普通には全然相異なつた精神作用であると
考へられて居る。併し、余は此の二つの精神作用は決して
別種の者ではなく、本來同一の精神作用であると考へる。
然らば、如何なる精神作用であるか。一言にて言へば、主客
合一の作用である。我が物に一致する作用である。何故
に知は主客合一であるか。我々が物の真相を知るといふ
のは、自己の妄想、臆断、即ち所謂主観的の者を消磨し盡くし
て、物の真相に一致した時、即ち純客観に一致した時、始めて

之を能くするのである。例へば、明月に薄黒い處のあるは、兎が餅を搗いて居るのであるとか、地震は地下の大鱧が動くのであるとかいふのは主觀的妄想である。然るに我々は天文・地質の學に於て、全然かゝる主觀的妄想を棄て、純客觀的なる自然法則に従うて考究し、爰に始めて此等の現象の眞相に到達することが出来るのである。我々は客觀的になればなるだけ、益能く物の眞相を知ることができる。數千年來の學問進歩の歴史は、我々人間が主觀を棄て、客觀に従ひ來つた道筋を示した者である。次に何故に愛は主客合一であるかを話して見よう。我々が物を愛するといふのは、自己をすてて他に一致するの謂である。自他合一、

其の間一點の間隙なくして、始めて眞の愛情が起るのである。我々が花を愛するのは自分が花と一致するのである。月を愛するのは月に一致するのである。親が子となり、子が親となり、こゝに始めて親子の愛情が起るのである。親が子となるが故に、子の一利一害は己の利害の様に感ぜられ、子が親となるが故に、親の一喜一憂は己の一喜一憂の如くに感ぜられるのである。我々が自己の利を棄てて、純客觀的即ち無私となればなる程、愛は大きくなり深くなる。親子・夫妻の愛より朋友の愛にすゝみ、朋友の愛より人類の愛にすゝむ。佛陀の愛は禽獸・草木にまでも及んだのである。

此の如く、知と愛とは同一の精神作用である。それで物を知るには之を愛せねばならず、物を愛するには之を知らねばならぬ。數學者は自己を棄てて數理を愛し、數理其の者と一致するが故に、能く數理を明らかにすることができるのである。美術家は能く自然を愛し、自然に一致し、自己を自然の中に没することに由りて、甫めて自然の眞を看破し得るのである。又一方より考へて見れば、我は我が友を知るが故に之を愛するのである。境遇を同じうし思想趣味を同じうし、相理會すること愈、深ければ深い程、同情は益濃かになる譯である。併し、愛は知の結果、知は愛の結果といふ様に、此の兩作用を分けて考へては、未だ愛と知の眞相

を得た者ではない。

知は愛、愛は知である。例へば、我々が自己の好む所に熱中する時は殆ど無意識である。自己を忘れ、唯自己以上の不可思議力が獨り堂々として働いて居る。此の時が主もなく客もなく、眞の主客合一である。此の時が知即ち愛、愛即ち知である。數理の妙に心を奪はれ、寢食を忘れて之に耽る時、我は數理を知ると共に之を愛しつゝあるのである。又我々が他人の喜憂に對して、全く自他の區別がなく、他人の感ずる所を直ちに自己に感じ、共に笑ひ共に泣く、此の時我は他人を愛し、又之を知りつゝあるのである。愛は他人の感情を直覺するのである。池に陥らんとする幼兒を救

ふに當りては、可愛いといふ考すら起る餘裕がない。

愛は感情であつて、純粹なる知識とは區別されねばならぬものと多くの人はいふ。併し、事實上の精神現象には純知識といふ者もなければ、純感情といふ者もない。かくの如き區別は、心理學者が學問上便宜の爲に作つた抽象的觀念に過ぎないものである。學理の研究が一種の感情に由つて支持されねばならぬやうに、他を愛するにも亦一種の直覺が基とならねばならない。一般に知といはれてゐる者は、人格を有たない者を對象とした場合の知識である。若し對象が人格を有つものであれば、これを有たないものと見做した場合の知識である。是に反して、愛は人格を有

つ者を對象とした知識である。若し對象が人格を有たぬ者であるならば、これを人格を有つ者として見た時の知識である。兩者の差は精神作用そのものにあるのではなくして、寧ろその對象の種類の上にあるものである。古來幾多の學者、哲人は宇宙實在の本體は人格的の者であるといふ。さすれば、その實在の本體を捕捉し得る力は、知でなくて愛であらねばならぬ。我々は唯愛に由つてのみ宇宙實在の本體に達し得る。愛は實に知の極點である。

以上、少しく知と愛との關係を述べた所で、今之を宗教上の事に當てはめて考へて見よう。主觀は自力である、客觀は他力である。我々が物を知り物を愛するといふのは、自

力をすてて他力の信心に入る謂である。人間一生の仕事が知と愛との外にないものとすれば、我々は日々到他力信心の上に働いて居るのである。學問も道德も皆佛陀の光明であり、宗教といふ者は此の作用の極致である。學問や道德は個々の差別的現象の上に、此の他力の光明に浴するのであるが、宗教は宇宙全體の上に於て、絶對無限の佛陀其の者に接するのである。「父よ、若しみこゝろにかなはば、この杯を我より離したまへ、されど我が意のまゝをなすにあらず、唯みこゝろのまゝになりたまへ」とか「念佛はまことに淨土にうまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり」と

かいふ語が、宗教の極意である。而して、この絶對無限の佛若しくは神を知るのは、只之を愛するに因りて能くするのである。之を愛するが即ち之を知るである。印度のヴェーダ教や、新プラトニ學派や、佛教の聖道門は之を知るといひ、基督教や淨土宗は之を愛すといひ又は之に依るといふ。各自其の特色はないではないが、其の本質に於ては同一である。神は分析や推論に由りて知り得べき者でない。實在の本質が人格的の者であるとするれば、神は最人格的なる者である。我々が神を知るのは、唯愛又は信の直覺に由りて知り得るのである。故に我は神を知らず、我唯神を愛す、又は之を信ずといふ者は、最も能く神を知り居る者である。

*
哲學者
文學博士
京都帝國大學教授

*
(西田幾多郎)

一五 文章の一進境

文章を作る時に、作らうといふ意志あり、書くべき事柄もあるに拘らず、どうしても出来ない時がある。それが何か病氣の爲に頭が痛むとか、或は或事情の爲に思想が混亂するとかいふのなら、どうも仕方がない。病氣の恢復、思想の沈靜の時期を待ち、自然その不良原因の去るのを期するより仕方がない。併しさういふ事情でなく、身體も四圍の事情も、凡て健全無事である時に、どうしても文章の出来ない事があるものである。それには種々の場合があるが、その

時にどうしたらよいか。

文章が出来ない時にも種々あるが、先づ第一に、藝術的の良心が餘り強盛に過ぎる時、又世間的の名譽心の強烈な時は、どうしても文は出来ないものである。筆を手にして紙に向つた時、拔群の巧妙なものを作らうと期待して、その念慮が餘り強烈な時は、我が心がそれに束縛せられてしまつて、自由自在に筆を運ぶことが出来なくなる。譬へば、平素から學業好成績の子供が、多數の人の前に引出されて何か試験でもされる時に、その子供の名譽心が餘り興奮して、澤山の人に賞讃せられようとする時は、所謂、しやちごはくなつて、却つて平素の成績よりも極めて劣等なものとなるや

うなものである。かういふ例は、作文家には常にありがちの事である。かゝる場合には度胸を据ゑなければならぬ。獨り文章ばかりではない、世間の何事でも、名譽心の強烈といふ時期を通過しなければ、決して眞の進歩をするものではない。故にかゝる目に遇つた時には、これを氣にかけて心配する必要は少しもない。つまり手を懸崖に放すといふ心持で、高い所からぼんと一つ飛んでみるといふ料簡になると、直書けるものである。何とかして人を驚かさやうな巧みな文を作つて見ようとする、どうしても書けない。うまくても拙くてもこれぎりだといふ調子でやつてみると、存外面白く書けるものである。次に道具を見失つてし

まふと出来ない。道具を見失ふといふのは、譬へば、何か物を切らうとする時、切る道具がなかつたり、縫はうとする時に針がなかつたり、糸がなかつたりする。これと同じく、文を書くにも、道具がないと書けない。一寸古人の言つた好い語を得て、それから書き出さうとしたり、適當な詩歌を引用して、文の締めや飾りにしようとする時など、それが思ひ出せないとき、書きにくいものである。

これには平素の心がけが肝要である。いざ文を書くといふ時、又は書いて居る最中に、急に探索するといふのは無理である。材料はとにかく、道具は平常から用ひ慣れて、使ひよくなつて居なければならぬ。全くこれは平常の心が

け次第である。さて、この道具が見つからない爲に筆が滯つて困るやうな心持がしたならば、之を用ひないで文を作るといふ決心をしなければならぬ。梃は道具の一であるが、棍棒なら何でも梃になる。梃があれば重い物も動かせる。今重いものを動かさうとする場合に、何か適當な道具が見つかつたならば、之を梃として重い物を動かさうとする、丁度其のやうな場合に、急に梃に適當なものが搜せると極つたわけのものではない。こんな心の起るのは、自己の無理な注文であると斷念して、それに頼らずに文を作り上げてしまはなければならぬ。昔からかかる場合の需要を充す爲に、種々様々の書物が出來て居るが、かかるものは餘

り役に立つものではない。少くとも、自分だけは未だ曾て此の種類のものから恩恵を享受した記憶はない。

次に、又文を書いて居る最中に行詰るといふことがある。どんな家でも、何處までも眞直にずん／＼奥まで行けるものではないやうに、文章も或點に到達すると行詰つてしまつて、右にも左にも行かれぬやうな場合がある。恰も、拔け道のない路次に這入つたやうなものである。更にたとへてみれば、谷川の流が、右曲左折して居るその曲り目の所にいつも景色のよい所が多くあるやうに、文章も行詰つてしまつて、一句も一語も出ない場合、更に進む所に其の文の一番妙味のある所が出來るのである。一度行詰つてしまつ

たならば、どうしても方向を一度いづれへか轉換する必要がある。併し、その時どつちに行つてよいかわからぬ事がある。例へば、彈劾文や檄文を書くとするれば、何事も一通り述べてしまつた後は、ばつたり行當つてしまふ事になる、全く實に困る事がある。その時、併しと言つて一應假設的に敵方に同情するやうな書き方をして、更に之を打破るやうな書き方をする。恰も一度行詰つた谷川が更に方向を轉じて流下するやうなものである。古人の名文の中には、かゝる趣を帯びて居るものが多い。碁でも將棋でも、一度行詰つてしまつて、更に局面を展開する所に面白みがあるのである。若し文を作る最中、行詰るやうな事があつ

たならば、「ここが文の妙味の生ずる所だ」と考へて、一奮發しなければならぬ。

以上のほか、文章が出来ない場合はいくらかもあるが、要するにさういふ場合に出逢ふ度毎に、それが、自分の一進境であつて、新しい技倆を得るに至るのだと思はなければならぬ。少しも曲折のない河流は、其の風景が頗る平凡である如く、未だ曾て文が出来ないといふ目に逢つた事のない人の文章は、必ず平凡な文である。偉人が成功するまでには、必ず曲折や波瀾が伴なつて居る如く、いつもすらくと書ける人の文章は、必ず平凡な文である。文が出来ないといふ種々の場合を切りぬけて進んで、始めて眞の文章家とな

*
名は成行
小説家

れるものである。

*
(幸田露伴)

一六 自然詩人としての赤人と人麿

日本最初の自然詩人は誰であるかと尋ねたならば、多くは山部赤人と答へるであらう。西行や芭蕉も赤人を祖としてゐる。しからば、赤人の自然に對する愛はいかなるものであつたらうか。赤人の歌を讀んで特に注意されることは、「瀬の音ぞ清き」清き白濱等「清き」といふ語が續出することである。彼が愛したのは清淨な自然である。

田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ

富士の高嶺に雪は降りける。

の歌に於て彼が讚美したのも清淨の神々しさであつて、今日の登山家がよるこぶやうな偉大なる力の感じを中心にした山岳美ではなかつた。彼が自然の清淨さを讚美した裏面には、人生の汚濁さを厭惡する心があつたであらう。當時奈良の社會は既に寵臣が權を専らにし、風俗が糜爛し始めてゐた。彼の祖先は顯宗・仁賢の二帝を奉戴した伊與來目小楯であるらしく、山部の姓が示す如く代々山林官であつたとすれば、自然に親しむ性情を遺傳して來たのであらう。また「あかき心等に於ける「あかき」と「清き」とは、古代語として同じ意味を有したことを考へると、赤人の名にも清淨を慕ふ心が察せられるのであるまいか。そして、奈良の

都會生活を見ると、既に腐敗し、彼をして面をそむけしめるものがあつた。そこで、彼は清浄なるものを慕ひ、自然のうちに放浪した。彼以前の自然の歌は人生の裝飾或は背景としての自然、官能的に快感を與へる自然の歌であつた。赤人が始めて清き自然を、汚れたる人生に對立するものとして、精神的に自然を愛したのである。彼が西行及び芭蕉の先達となり、最初の自然詩人とせられるのは、彼が精神的な自然の發見者であるからである。かくて、彼の自然の歌は曾てなき清新・幽玄なるものとなつた。二三の例を示せば、

烏羽玉の夜のふけ行けば

久木生ふる清き河原に千鳥しばなく。

吾が背子に見せんと思ひし梅の花、

それとも見えす雪の降れゝば。

春の野に莖つみにと來し我ぞ、

野をなつかしみ一夜ねにける。

我が國の文學に見られた自然の愛は赤人が歌つた如き清浄な自然を慕ふ情と、人間を慕ふ心を移入して、四季の自然のうちにもあはれを感じる心とを本としてゐる。しかし奈良朝に於ては、これと趣を異にする自然を歌つた偉大な詩人柿本人麿があつた。彼の自然觀には皇室を崇拜の中心にし、自然神をもすべてこれに従屬せしめた、古事記の

考へ方と等しい神話的な見方がある。

八隅知し吾が大君の神ながら神さびせすと、吉野川瀧つ河内に、高殿を高知りまして、登り立ち國見をすれば、壘なはる青垣山の山神の奉る御調と、春べは花翳し持ち、秋立てば紅葉翳せり。夕川の神も、大御食に仕へまつると、上つ瀬に鶉川を立て、下つ瀬に小網さし渡し、山川もよりて仕ふる神の御代かも。(幸千吉野宮之時作)かくの如く、自然を生ける心あるものとして感じつつあるがために、感情が高潮するとき、彼自身も

……夏草の思ひしなへて忍ぶらむ、妹が門みん靡けこの山。

秋山に落つる黄葉しまらくは

な散り亂れそ妹があたり見む。

の如く自然に命令することもあつた。

しかし、自然は決して従順な好意ある彼の僕ではなく、計りがたい心をもつた、生命をとかし去つて自己の一部とする嚴肅な存在であつた。人麿は、古事記に表現されてあるやうな皇室崇拜の心を抱いてゐた人であつたが、二十三四年の時仕へた日並知皇子は二三年にして薨じ、日並知皇子尊殯宮之時作歌参照次いで仕へた高市皇子もまたやがて薨じ、高市皇子尊殯宮之時作歌参照間もなく隠れて訪れてゐた婦人に死なれ、妻死之後泣血哀慟作歌更に正妻を失ひ、彼

の女が形見として「置ける嬰兒の乞ひなく毎に、取り與ふものしなれば、をとこじもの腋挟みもち途方にくれて、悲歎の涙に咽んだ。こゝに於て、死は彼の一切の思想の背景となり、天地及び國家の悠久と、人生と自然現象の須臾なこととの對照を感じた。かくて彼は死を背景として愛を歌ひ、死を通じて人と自然とが一つになることを、一種の神話的變形として歌つた。

八雲さす出雲の子等が黒髪は

吉野の川の沖になづさふ。

秋山の黄葉を茂み惑はせる

妹を求めん山路知らずも。

(土居光知)

* 文學士
英文學者
東北帝國大學教授

一七 百蟲譜

蝶の花に飛びかひたる、やさしき物の限なるべし。それも啼く音の愛なければ、籠にくるしむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ莊周が夢もこの物には託りけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。

古池に飛んで翁の目覺したれば、この物の事更にも誇り難し。蟬はただ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やや日ざかりに鳴きさかる頃は人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも、初蛙ともいふ事をきかず、この者ばかり初蟬と

* 昔者莊周夢爲蝴蝶、栩栩然蝴蝶也。俄然覺、則蘧々然周也。不知周之夢爲蝴蝶、與、蝴蝶之夢爲周歟。(莊子)

* 花になく驚、水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける。

* 古池や蛙とび込む水の音 (芭蕉)

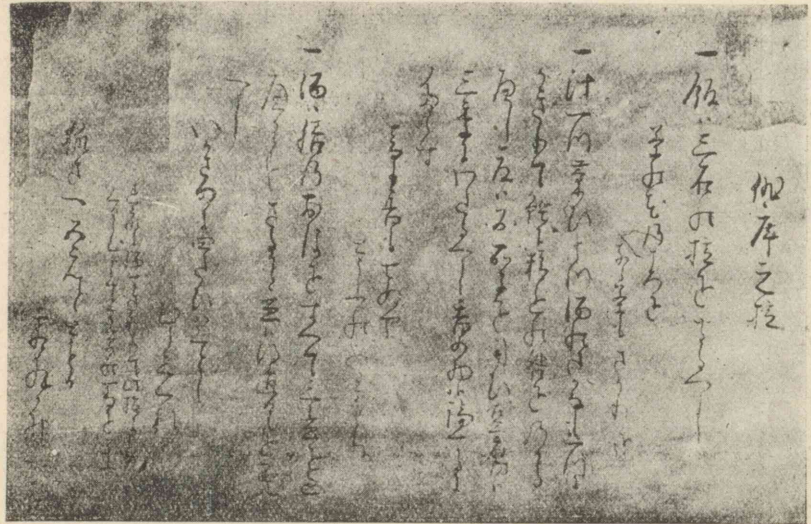
*やがて死ぬけしきは見えぬ蟬の聲
 (芭蕉)
 *胤恭勤不_レ倦 博學多通。家貧不_レ常得_レ油。夏月則練囊盛_二數十螢火_一、以照_レ書。以_レ夜繼_レ日焉。(晉書車胤傳)

いはるゝこそ大いなる手柄なれ。「やがて死ぬけしきは見えぬ」と、このものの上は翁の一句に盡きたりといふべし。螢は比ぶべきものもなく景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすだく。五月の闇はただこの者の爲にやとまでぞ覺ゆる。然るに貧_{*}の學者にとられて、油火の代りにせられたるはこの者の本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく頃ならむ。つくく_レぼうしといふ蟬は、つくし戀ひしといふなり。筑紫の人の旅に死してこの

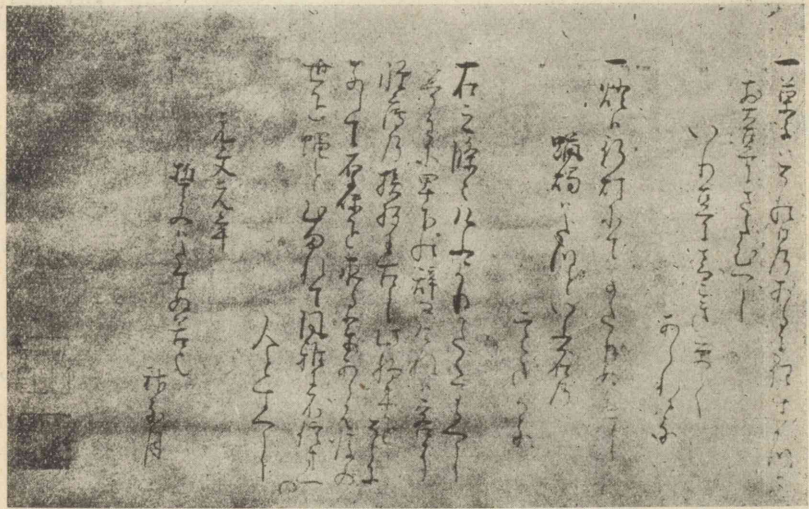
*蜀望帝の故事

*初隨_二楚王_一、朝宿未央宮。見_二蜘蛛大如_レ栗。四面築_レ羅網、有_レ蟲觸_レ之而死。舍乃歎曰、吾生亦如_レ此耳。仕官者人之羅網也。豈可_レ淹_レ歲。於是挂_レ冠而退。時人謂_レ之爲_二蜘蛛之隱_一。(金樓子)



他存之徒

ものになりたりと、世の諺にいへりけり。あはれ_{*}蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。蜘蛛はたくみに網を結んで、ひそまつて物を害せむとす。もろこしのむかしには退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていとにくし。古代朝敵の初として、頼光をさへおびやかしたるいとおそろし。さはいへ、



廢宅の荒れたる軒に蟬の羽
 などかけ捨てたるは、いさゝ
 非かあはれ添ふる折もあらむ
 か。かれはかひくしく巢
 作りてこそあれ、東海道にち
 席りほひたる宿なし者をば、く
 もとはいかていふやらむ。
 捉 蠶の生涯は世の爲に終り、
 火取蟲はたがために身をこ
 がすや。蜉蝣ははかなきた
 めしにひかれ、蓼くふ蟲は不

*淳于棼、醉夢入大槐安國、見玉。王曰、吾南柯郡、風卿爲守。居凡廿載。使者送出穴。遂寤。尋古槐下蟻穴、洞然明。乃槐安國。又一穴直上南枝、即南柯郡也。(異聞集)
 *千丈之隄以螻蟻之穴潰。(韓非子)
 *憎若蠅。賦がある
 憐紙魚。詞がある

物ずきの謗となれり。おなじ寶の名によばれて、玉蟲はや
 さしく、こがね蟲はいやし。
 蟻は明暮にいそがしく、世の營に隙なき人には似たり。
 東西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのが
 れて、その身の安き事を得む。さるもたよりあしきかたに
 穴を營みて、千丈の隄を崩すべからず。
 蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。狗の
 齒に噛まる、蚤はたましくにして、猿の手にさぐらる、虱
 は逃るゝこと難かるべし。
 蝸牛は只水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらむ。
 家もちたれども、行く先々をおひ歩くは、雲水の安きにも似

ず。蛇・蚯蚓の足なくても歩むべくは、蜈蚣をさむしの數多
きは不用の事なり。

*欲_下以_二蟪蛄_一之斧_一
禦_中降車之隆_一（文
選）

蟪蛄^{*}の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつな
り。人の上にもこのたぐひはあるべし。

*原は駿河國駿東郡
吉原は同國富士郡

蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。ただ原吉原を駕
にのりて、富士を眺めゆく人には似たり。

促織・鈴蟲・轡蟲はその音の似たるを以て名によばる。松
蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附きたるならむ。

毛生ひむくつけき蟲にもおなじ名ありて、松を枯らし、人に
うとまる。一つ在處に二人の八兵衛ありて、一人は後生を
ねがひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲のたぐひなるべし。

*晋_下傅康_上字叔夜_一。有_二
奇才_一。長好_二老莊_一。
所與_二交_一者唯阮
籍_一。山濤_一。預_二其流_一。
者。向秀_一。劉伶_一。阮
咸_一。王戎_一。爲_二竹林之
遊_一。世所謂_二竹林七
賢也_一（蒙求）

*伊人
名古屋藩士
天明三年歿

蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき
夕、初めてほのかに聞きたらむ、又は長月の頃、力なく残りた
るは寂しきかたもあり。蚊帳釣りたる家のさま、蚊遣火焚
く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊に
はげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけ
む。
*（横井也）有

一八 苦悶と解決

以前には人間をも自然をも支配する神があつたので、地
震があれば地の神を恨むことも出来、旱がつづけば天の神
に訴へることも出来たのですが、今は自然界にどんな災厄

が起つても、その責任の歸する所が無いのですから、人は自然に對し自然の許す限りに於て其に打克たうとしますが、それ以上は自然に威壓されてゐる外はありません、即ち神に由つて救はれると言ふ信賴が全く失はれてしまひました。更に人間自身の事に就いては勿論、自己以外の支配と救済を求め難い事が明白になり、自己の運命は自己の實力で展開しなければならぬと言ふ自覺が何人にもありません。即ち他力に待つ迷信時代は過ぎ去つたのです。私の子供の頃までは、字を善く書きたいと言つて菅公の社に祈つたり、歌を詠むために住吉や玉津島の神に參つたり、良縁を求めゝる爲に山城の嵯峨へ十三參りをしたりする少年・少

女がありました。が、今の中學生や女學生に、そんな迷信を持つ者の一人も無いのは言ふまでもありません。

昔と今との生活に於ける變化は、精神的にも様式的にも顯著である中に、前述の如く、自己以外の無形な靈物の權力を認めないといふ事は、人智の開明に伴なふ已むを得ない變化とは言ひながら、是がため人に「頼りなさ」「いらいらしさ」「底さびしさ」を感じさせるに至つたのは、一つの大きな不幸だと思ひます。

今こそ、地上の生活は一切人間の自力によつて建設し、推進して行かねばならぬ時代が明らかに到來したのです。個人・個人で出来る事は個人でしますが、それ以上の事は人

間相互の力を合せてする外は無いのです。我々は曾て神や佛に對してした「祈禱」を自己の内部の力に向けると共に、また他の人間の協同の力に向けます。「感謝」もまた神や佛に向けた代りに、今は人間相互の力に向けます。是は人が神の支配から解放されて、眞に人としての「獨立」の端緒を開いたのですから、互に慶賀し合はねばならぬ人間的革命に相違ないのですけれども、目前の實感は幸福よりも不幸、快樂よりも悲哀を感じる事の方が多いやうです。

と言ふのは、今日はまだ、個人で解決の出来る事でも、個人の力をその適所に於て發揮するまでの準備と位置とを、社會組織の雑多な原因——經濟的・政治的・因襲的等の原因——

——に由つて拒まれてゐるのが一つの大きな理由であり、また個人が獨立の欲望と自負とばかり旺盛であつて、その割合に實力の伴はないのも一つの大きな理由であり、次には萬人協同の新しい社會組織がまだ成立しない爲に、個人以上の力を合せてせねばならぬ問題が、事毎に扞格して、何の上にも信頼すべき社會的標準を持たないのが、亦一つの大きな理由であると思ひます。

かくして、神から離れた人間は、唯一の信頼すべき人間相互の力をまだ確に信頼し得ないと言ふ境遇にあるのです。意志の弱い者は自己を呪ひ、他人を怨んで絶望し、偶、自殺や發狂する者があり、或は酒色と放言と凶行とに刹那の痛快

を求めて、自己良心の痲痺を計る者さへあり、また大多數の意志の弱い者は、新時代の理想に背を向けて、利己主義にあらざれば便宜主義に墮落してしまひます。所謂行き過ぎた過激思想も、それを矯めようとして後へ引き過ぎる反動思想も、要するに、この社會の無標準時代に、右往左往して、がいてゐる人間の兩極端だと思へば、輕視する事の出來ない眞面目な人間的問題であつて、決して他人の事て無く、私達自身の上にかゝつてゐるのです。

併し、社會には意志の強い、感情の純粹を保つて、新時代の志向に忠實な人々があります。比較的少數であるにしても、只今は其の人々が各所に分布されて居ます。知名な識

者階級の一部にあるばかりでなく、我々無産者の凡人の間にもあります。私の此の一文を植字し印刷して下さる職工達の中にもきつとあります。猶今日は少數でも、未來は續續と生れる孩兒達の中に殖えて行きます。其の人達が、苦痛の中に辛うじて忍びながら、一つ一つ石を積上げて行く結果は、新しい秩序と標準とを未來の社會に實現するでせう。私は一般の人達に、現實の混亂を見て絶望する短氣を抑へて欲しいと思ひます。人が神々に代つて、自ら人間生活を調節し、地上の樂園を建てようとするには、猶久しい時と多くの刻苦とを要するのでは無いでせうか。

農民は自然に威壓されながら、黙々として自然を利用し、

*歌人
社會、文藝の評
論家

爲すべきことを爲します。あの堅忍と勤勞とが、永久に社會各方面の生活に適用さるべきだと思ひます。(與謝野晶子*)

一九 忠をいたすは人臣の道

凡そ王土に生れて、忠をいたし命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。しかれども、後の人を勵まし、其の跡をあはれみて、賞せらるるは君の御政なり、下としてきはひ争ひ申すべきにはあらぬにや。まして、させる功なくして、過分の望をいたすこと、みづからあやぶむるはしなれど、前車の轍を見る事は、誠に有りがたきならひなりけむかし。中古までは、人のさのみ豪強なる

をば戒められき。豪強に成りぬれば、必ずおごる心あり。はたして身をほろぼし家を失ふためしあれば、戒めらるるもことわりなり。鳥羽院の御代にや、諸國の武士の、源平の家に屬する事をとどむべし。といふ制符たびくありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は宣旨を給はりて、諸國の兵を召具しけるに、近代となりて、やがてかたらはるゝ族多くなりしによりて、此の制符は下されき。はたして、今までの亂世の基なれば、いひがひなき事になりけり。此の頃より諺には、一度軍にかけあひ、或は家の子郎從、節に死ぬるたぐひもあれば、わが功におきては、日本國を給ひ、若しくは半國を給はりても足るべからずなど申すめる。

まことにさまで思ふ事はあらじなれど、やがてこれより亂るはしともなり、又朝威の輕々しさも、おし量らるゝものなり。言語は君子の樞機なりといへり。あからさまにも、君をないがしろにし、人におごる事はあるべからぬ事にこそ。さきに記し侍りし如く、堅き氷は霜をふむよりいたるならひなれば、亂臣・賊子といふものは、其の初め心言葉を慎まざるより出てくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光のかはるにもあらず、草木の色の更まるにもあらじ。人の心のあしくなり行くを、末世とはいへるにや。昔、許由と云ふ人は、帝堯の國を傳へんとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父はこれをきゝて、この水をだにきたなかり

てわたらず。其の人の五臟六腑とかはるにはあらじ。能く思ひならはせる故にこそあらめ。

なほ行く末の人の心、思ひやるこそあさましけれ。大かたおのれ一身は、恩にほこるとも、萬人の怨を残すべき事をばなどか顧みざらむ。君は、萬姓の主にてましませば、かぎりある地をもちて、かぎりなき人に分たせ給はむ事は、おしりて量り奉るべし。もし一國づつを望まば、六十六人にて、皆ふさがりなむ。一郡づつといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ。五百九十四人は悦ぶとも、千萬人の人はよろこばじ。況や日本の半ばを心ざし、みながら望まば、帝王はいづくをしらせ給ふべきにか。かゝる心のきざして、言葉に

も出て、おもてに恥づる色のなきを、謀叛の初といふべきなり。昔の將門は比叡山に登りて、大内を遠見して、謀叛を思ひ企てけるも、かゝるたぐひにや侍りけむ。昔は人の正しくて、將門に見も懲り、聞きも懲り侍りけむ。今は人々の心かくのみなりにたれば、此の世はいよゝゝ衰へぬるにや。

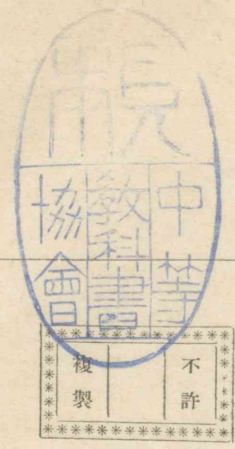
漢の高祖の、天下をとりしは、蕭何、張良、韓信が力なり。これを三傑といふ。萬人に勝れたるを傑といふとぞ。中にも張良は、高祖の師として、謀を帷帳の中にめぐらして、勝つ事を千里の外に決するは、この人なり」と宣ひしかど、張良は驕る事なくして、留といひてすこしきなる所を望みて、封ぜられにけり。あらゆる功臣多くほろびしかど、張良は身を

全くしたりき。近き代の事ぞかし。頼朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追討せしに、みづから向ふことありしに、平重忠が先陣にて、その功勝れたりければ、五十四郡中、いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、極めたるすくなき所を望み給はりけるとぞ。これは、人にひろく賞をも行はしめむが爲にや、賢かりけるをのこにこそ。又直實といひける者に、一所を與へ給ふ下文に、日本第一の剛の者なりと書きて給ひてけり。一とせ、彼の下文をもちて、奏問する人のありけるに、褒美の詞の甚だしさに、與へたる所のすくなさ、誠に名を重くして、利を軽くしける、いみじき事と、口々に譽めあへりける。いかに心得てほめけむといとをかし。

これまでの心こそなからめ、事に觸れて、君をおとし奉り、身を高くする輩のみ多くなれり。ありし世の、東國の風儀もかはりはてぬ。公家のふるき姿もなし。いかに成りぬる世にかと歎き侍る輩もありときこえしかど、中一とせばかりは、誠に一統のしるし覺えて、天の下こぞり集りて、都の中、はえばえしくこそ侍りけれ。

(神皇正統記)

女子新讀本 卷十 終



大正十五年七月十五日
大正十五年十月八日
大正十五年十月十二日
日發行
日訂正再版印刷
日訂正再版發行

女子新讀本
定價 卷一、二、三、四 各金四拾貳錢
卷五、六、七、八 各金拾八錢
卷九、十 各金拾七錢

昭和三年度臨時
定價 卷一、二、三、四 金七拾錢
卷五、六、七、八 金六拾壹錢
卷九、十 金六拾貳錢

著者	久松潜一
發行者	東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地 佐藤正叟
印刷者	東京市京橋區弓町二十五番地 高橋郁

發行所 東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地 振替口座東京二九五〇七番 至 文堂 電話青山一三四六番 四三四三番

弊堂發行の教科書は供給差支無き際常に澤山製本出來準備致して居ますから若し貴地書店に品切れ等にて御差支の節は何卒弊堂へ直接御注文下さい直に御送り申上げます

(三三印式社印)



玉文堂